

兵發庫掘調査報告書第45次告白

2008

神戸市教育委員会

兵庫津遺跡第45次書
発掘調査報告

2008

神戸市教育委員会

序

六甲山地を背に、大阪湾に向かって広がる兵庫の港は、古代より天然の良港として知られてきました。古くは大輪田泊と呼ばれ、国際貿易や瀬戸内航路の拠点として、幾多の戦乱や自然災害をのりこえて栄えてきました。まさに国際港湾都市神戸の礎といえます。

兵庫津遺跡は、これまでの発掘調査によって港町の町屋が検出されるなど、当時の町並みを劈闢とさせる資料が確認されています。

そして今回の報告では、その兵庫津の歴史に新たな資料を加えることができました。本書が文化財の保護に活用されるとともに、今後とも歴史遺産を活かしながら、兵庫の地域が発展していくことを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の刊行に際し、関係諸機関から多大な協力をいただいたことに感謝いたします。

平成20年3月

神戸市教育委員会

例　言

1. 本書は、神戸市兵庫区三川口町1丁目4-6, 4-7において実施した発掘調査の報告書である。
2. 当調査は当該地において計画されたマンション建設に伴うもので、神戸市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の組織は本文に記した。
4. 発掘調査ならびに整理作業・本書の刊行に際しては、事業主の和田興産株式会社に多大なる協力をいただき、現地作業では、施工担当の株式会社村上工務店にご協力を得た。
5. 本書で使用した方位・座標は、国土座標第V系を基準にし、水準は東京湾平均水準(T.P.)を使用した。
6. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「神戸南部」「神戸市」、神戸市発行の2千5百分の1地形図「神戸駅」「兵庫」を使用した。
7. 遺構の写真撮影の一部は丸山潔が行った。その他の遺構の写真撮影・実測は佐伯が行った。また、一部ラジコンヘリでの空中写真測量を株式会社GEOソリューションズに業務委託した。
8. 人骨の取り上げ、観察については中村大介の手を煩わせた。
9. 遺物の写真は、杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。また、遺物のX線写真については、中村が撮影した。
10. 遺物の整理は、神戸市埋蔵文化財センターで実施し、黒田恭正の教示を得た。
11. 本書の執筆は、人骨については中村が行い、その他の執筆・編集は、佐伯が行った。
12. 発掘調査で出土した遺物ならびに図面・写真類は、神戸市教育委員会が神戸市埋蔵文化財センターで管理・保管している。

目 次

I	発掘調査に至る経緯と経過	1
1	発掘調査に至る経緯	1
2	発掘調査の経過	2
3	調査組織	2
II	立地と周辺の発掘調査	3
III	発掘調査の概要	5
1	基本層序と遺構面	5
2	近世墓	7
3	建物・土坑	21
4	中世の遺構	25
IV	近世墓について	29
埋葬形態・埋葬施設	29	
埋葬肢位	29	
副葬品	29	
墓域・配列について	30	
被葬者	30	
時期	31	
類例	31	
V	まとめ	33
報告書抄録		

挿 図 目 次

図1	調査位置図	1	図21	ST24平・立・断面図	16
図2	調査区配置図	2	図22	ST24出土一石五輪塔実測図	16
図3	兵庫津遺跡範囲図	3	図23	ST25, 26平・断面図	17
図4	兵庫津遺跡内周辺調査位置図	3	図24	ST27平面図	18
図5	近世遺構配図	5	図25	ST27出土一石五輪塔実測図	18
図6	調査区上層断面図	6	図26	ST28~30平面図	18
図7	近世墓群平面図	7	図27	ST29出土遺物実測図	18
図8	ST04出土遺物実測図	8	図28	墓塚出土数珠実測図	19
図9	ST05出土遺物実測図	8	図29	墓塚出土煙管実測図	19
図10	ST01~06平・立・断面図	9	図30	SB01平・断面図	21
図11	ST07~11平・立・断面図	11	図31	SP94出土遺物実測図	22
図12	ST12, 13平・立・断面図	12	図32	SK44平・断面図	22
図13	ST14平・立・断面図	13	図33	SK44出土遺物実測図	22
図14	ST15~17平・断面図	13	図34	SK115平・断面図	23
図15	ST17出土遺物実測図	13	図35	SK115出土遺物実測図	24
図16	ST18平・断面図	14	図36	中世遺構配置図	25
図17	ST19~21平面図	14	図37	SE02平・断面図	26
図18	ST22平・断面図	15	図38	SE02出土遺物実測図	26
図19	ST22陶器棺穴測図	15	図39	SE03平・断面図	27
図20	ST23平・断面図	16	図40	SE03出土遺物実測図	27

図版1 SK129平・断面図	28	図43 SK26出土瓦実測図	28
図版2 SK129出土遺物実測図	28	図44 墓列推定図	32

表 目 次

表1 墓墳出土数珠玉一覧	19
表2 墓墳出土煙管一覧	19
表3 近世墓一覧	20

写真図版目次

図版1	1. 近世墓群 2. ST12~14, 18~20	図版16	墓墳出土銅錢・煙管
図版2	1. ST01 2. ST02 3. ST03	図版17	墓墳出土銅錢・煙管レントゲン写真
図版3	1. ST04 2. ST05	図版18	1. 墓墳出土数珠玉 2. 同レントゲン写真
図版4	1. ST06 2. ST08	図版19	1. ST01人骨 2. ST02人骨 3. ST03人骨 4. ST03人骨(部分)
図版5	1. ST10 2. ST12, 13	図版20	1. ST05人骨 2. ST05下顎骨 3. ST06人骨
図版6	1. ST09 2. ST12 3. ST14	図版21	1. ST08人骨 2. ST10人骨 3. ST10寛骨周辺
図版7	1. ST21 2. ST22, 05 3. ST22	図版22	1. ST12人骨 2. ST14人骨
図版8	1. ST19 2. ST24 3. ST24	図版23	1. ST13下顎骨 2. ST14頸蓋骨側面 3. ST14上腕骨(左)・ST22上腕骨(右) 4. ST14大腿骨(左)・ST22大腿骨(右)
図版9	1. ST25 2. ST26 3. ST29	図版24	1. ST19-2人骨 2. ST19頸蓋骨側面 3. ST20歯
図版10	1. VI区近世遺構 2. SK44 3. SK115土層断面	図版25	4. ST21人骨 1. ST22人骨 2. ST24人骨 3. ST25頸蓋骨
図版11	1. II区中世遺構 2. V区中世遺構 3. SE02	図版26	1. ST28頸蓋骨・下顎骨 2. ST25歯(分析資料)
図版12	1. SE03 2. SE03断ち割り 3. SK129	図版27	SP94・SK44出土遺物
図版13	1. SK44出土遺物 2. SK115出土遺物	図版28	SK115出土遺物
図版14	墓墳出土遺物	図版29	SK115出土遺物
図版15	墓墳出土遺物	図版30	SK115出土遺物
		図版31	SE02・SE03出土瓦
		図版32	1. SK26出土瓦 2. SK129出土遺物

I 発掘調査に至る経緯と経過

1 発掘調査に至る経緯

兵庫津遺跡は、おもに兵庫区東出町から三石通にかけて広がる奈良時代から近世に至る複合遺跡として知られる。兵庫津は古代には「大輪田泊」と呼ばれ、早くから瀬戸内航路の港として機能していた。その後、平安時代末には平清盛により大修築を受け、室町時代には明との国際貿易の拠点として栄えた。応仁の乱以後、一時衰退するが、江戸時代に国内航路の港町として復活し、発展を遂げてきた。

発掘調査は、昭和60年以降、40数次にわたって実施されてきた。調査面積に大小はあるものの、これらの発掘調査では古代から近世の遺構・遺物が検出されている。特に近世については、絵図と一致する町屋関連遺構が確認された調査例があり、町並み復元のための貴重な資料となっている。遺物も、陶磁器類の日常雑器をはじめ、瓦や金属器、木製品、土製品など様々な遺物が出土し、当時の人々の暮らしぶりを彷彿とさせる。

近年は兵庫津遺跡内で共同住宅建築が増加しており、このたび当該地においてもマンション建設が計画された。そこで埋蔵文化財の状況を確認する試掘調査を実施したところ、従前建物の基礎搅乱があるものの、現地表下数十cm以下で近世の複数の遺構面と遺物包含層を確認した。また、基盤層である淡褐色砂から弥生土器が出土しており、至近地での弥生時代の遺構面の存在が予想された。

以上の試掘調査結果を受けて、事業者との協議のもと、建築工事で埋蔵文化財に影響を及ぼす部分について発掘調査を実施することとなった。

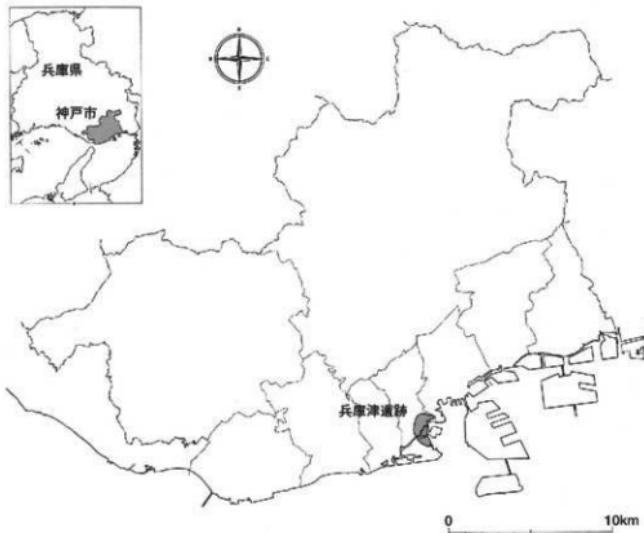


図1 調査地位置図

2 発掘調査の経過

発掘調査は建築工事の都合上、分割して行うこととなった。全てを調査してからでは建物基礎の杭打ち機が進入できないため、建物基礎杭に入る部分について先行して調査を行った。まず、上留め杭の打設後、平成19年5月17日～平成19年6月8日にⅠ～Ⅳ区について実施した。一度掘削残土を埋め戻して、建物基礎杭打設後、残りの部分であるⅤ・Ⅵ区について平成19年7月2日～平成19年8月17日に実施した。(調査区は図2のとおり設定)

調査は、遺物包含層および遺構面上面までの掘削を重機で行い、以下の遺構精査・掘削などは人力で行った。掘削残土は基本的に場内で仮置きしたが、一部搬出を行っている。

記録にあたっては、周辺での発掘調査成果との整合性をもたせるため、任意に打設した測量杭に国土座標を落した。また、発掘調査作業の進捗を図るために、部分的にラジコンヘリにより空中写真測量を実施した。

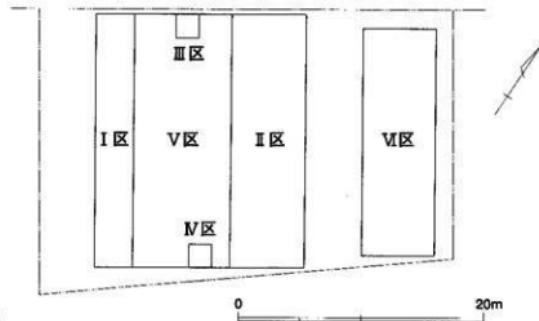


図2 調査区配置図

3 調査組織

現地での発掘調査完了後、出土遺物、記録図面・写真などの整理を埋蔵文化財センターで行った。平成19年度に実施した発掘調査と出土品整理作業にかかる組織は以下のとおりである。

教育長	小川 雄三
社会教育部長	黒住 章久
参事(文化財課長事務取扱)	柏木 一孝
主幹(埋蔵文化財指導係長事務取扱)	丸山 潔
文化財課埋蔵文化財調査係長	千種 浩
文化財課主査	安田 澄
事務担当学芸員	中谷 正
出土品整理担当学芸員	黒田 勝正
保存科学担当学芸員	中村 大介
調査担当学芸員	佐伯 二郎

II 立地と周辺の発掘調査

調査地は、JR山陽本線神戸駅～兵庫駅間の南側線路沿いに位置する。現在の標高は約2.8mを測る。兵庫津遺跡内では北西部に位置し、いわゆる寺町が形成された地区である。周辺は現在でも寺院が多く、福厳寺、久遠寺、恵林寺などが存在する。今回の調査地点は、元禄9年（1696年）の『攝州八部郡福原庄兵庫津絵図』（以下「元禄絵図」）では龍昌寺あるいは範國寺の寺域に該当する。

周辺の既存の発掘調査は、隣接地ではないが数例実施されている。本調査地の南西側約180mに位置する第9次調査（平成8年度）では、整地層から均整唐草文や波状文軒平瓦、15世紀後半の土



図3 兵庫津遺跡範囲図

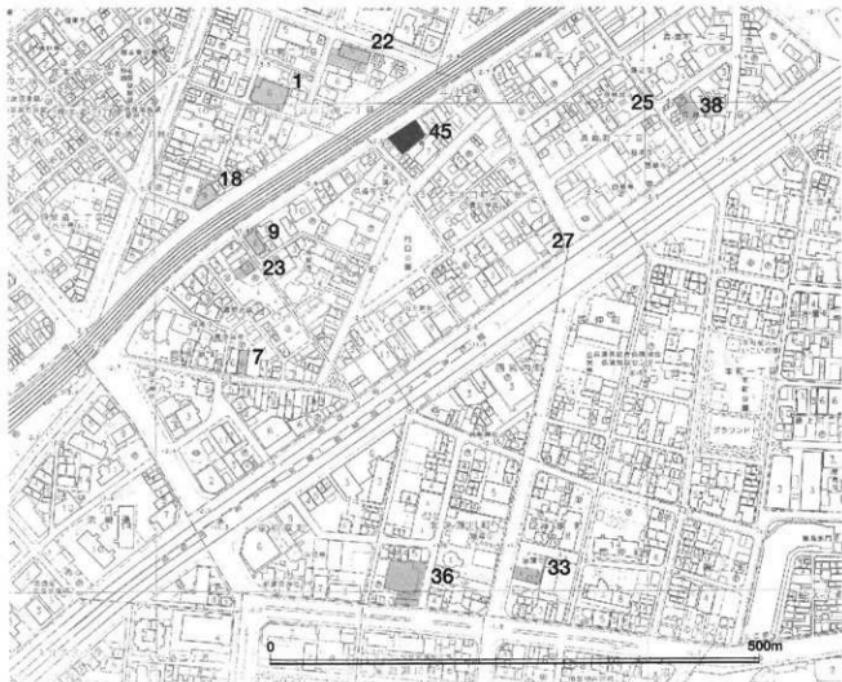


図4 兵庫津遺跡内周辺調査地位置図（番号は発掘調査次数）

師器皿などが出土しており、14世紀創建の福厳寺に関連するものと推定されている。また、淡茶色粗糲
より弥生土器が出土している。その南側の第23次調査（平成12年度）では、近世後半から末にかけての
溝、ピット、落ち込みなどが検出されている。第7次調査（平成6年度）では、近世の井戸、土坑、溝
などが検出されている。

本調査地から南東隅約180mに位置する第27次調査（平成14年度）では、近世の土坑が検出されている。

また、本調査地の東側約200mに位置する第25次調査（平成13年度）では、中世後期の落ち込みや近
世の掘立柱建物、礎石列などが検出されている。そのさらに東方約60mに位置する第38次調査（平成17
年度）では、中世前期の集落、近世の町屋が確認されている。

一方、JR線より北側の第1・18・22次調査（昭和60年度・平成11年度・平成11年度）などでは、河
道や湿地状地形のち耕作地として利用されていたことが判明した。『元禄絵図』によると町屋を囲う
外郭である「都賀堤」の外側に位置しており、近世の町屋は及んでいないことが発掘調査からも証明で
きた。

III 発掘調査の概要

今回の調査では、大別して3面の遺構面を検出し、中世から近世の遺構を確認した。ただし、從前建物の基礎搅乱が著しいことと、分割して調査を行ったため、調査時点で把握した遺構面同士で不整合が生じた部分がある。また、出土遺物についても検討が不十分である。ここでは、近世と中世の二つにまとめて調査の概略とおもだった遺構について記述する。

1 基本層序と遺構面

調査前の標高は約2.8mである。盛土・搅乱層の下現地表下約60cm～1.3mで、淡灰色砂質土～灰黃褐色砂質土を基盤とする第1面を検出した。部分的に土間が見られ、墓壙、溝、ピットなどを検出している。その下現地表下約60～80cmで、褐灰色砂質土を基盤とする第2面を検出した。土坑、溝、ピットなどがある。さらに現地表下約1～1.5mで、褐色砂を基盤とする第3面を検出した。土坑、井戸、落ち込みなど中世の時期の遺構を検出した。基盤層の砂は、古漆川によって運ばれ堆積した砂層と思われる。なお、宝曆の大火（1708年）による焼土層は調査地内では確認されなかった。

第3面の調査後、Ⅲ・Ⅳ区を除く各区で下層を確認するためトレンチを掘削した。それぞれラミナ状堆積など褐色砂～疊の堆積が見られたのみで、遺構は存在しなかった。現地表下約2.5m（標高0.3m）で涌水となり、以下の堆積状況は不明確である。遺物は、弥生土器が出土している。ローリングは受けているものの、比較的大きな破片もあるため、至近地での同時代の遺構の存在をうかがわせる。

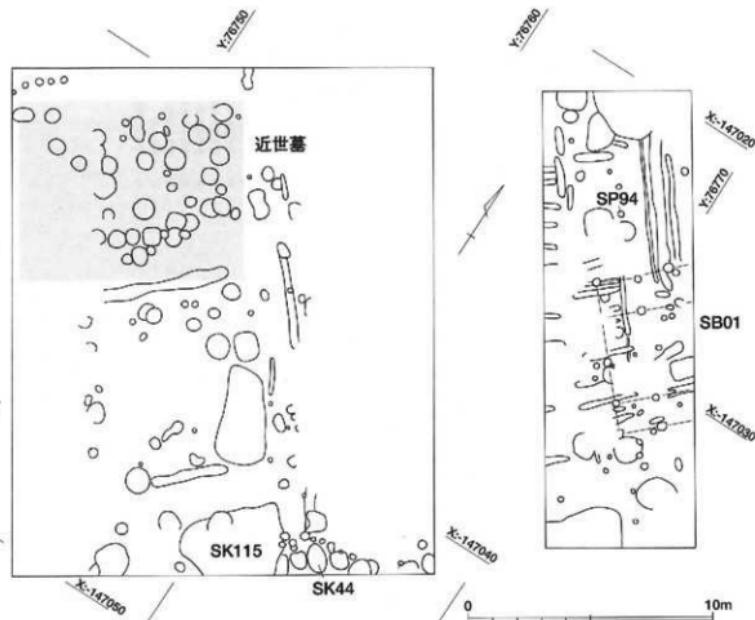


図5 近世遺構配置図

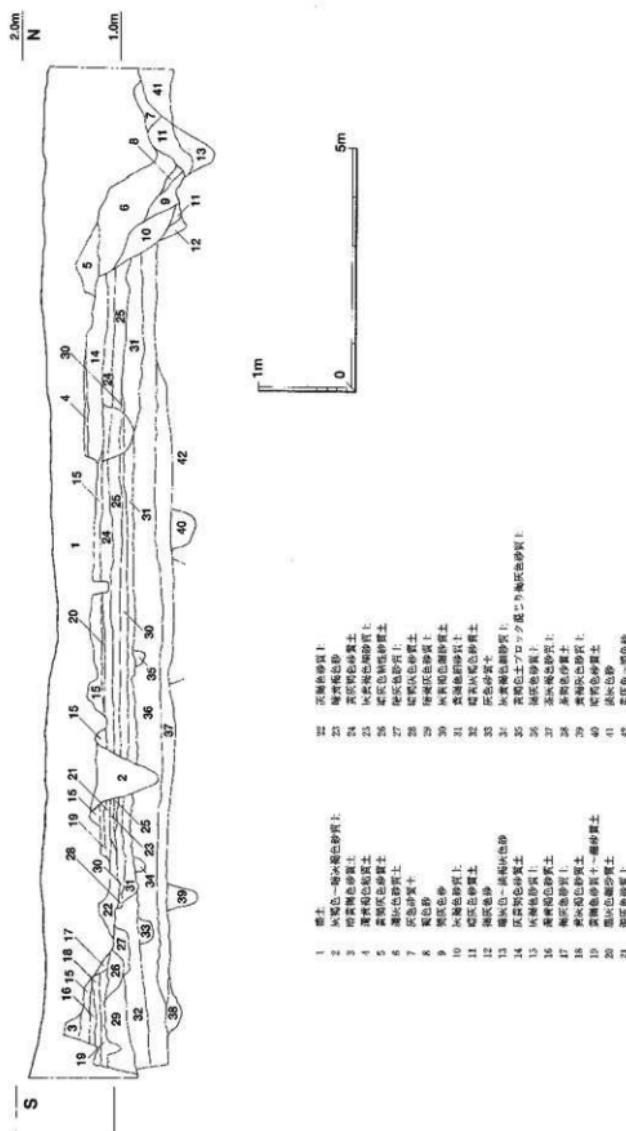


図 6 調査区土層断面図 (II・V区間)

2 近世墓

試掘調査段階で人骨と思しき破片が出土しており、また『元禄絵図』では調査地は寺境内に位置することから、発掘調査着手前から墓地が存在することが予想されていた。

発掘調査の結果、確認された埋葬遺構は総計30基で、2基の陶器棺と1基の方形木棺の他は円形木棺を主体とする。調査区北西部（I区北半およびV区北半）に集中して検出されており、限定された地区内で墓地が形成されていたことがうかがえる。

墓壙は砂層上に灰色土を埋土として円形の掘形と木棺の痕跡が明瞭に確認できた。ただし、後述のとおり上部構造は削平されて全くわからず、本来の墓壙が構築された面は不明である。ベースが砂層であることと、人骨はしっかりとしているように見えても脆弱であるため、調査には慎重を期した。

記録は、手作業での実測と一部を写真測量で図化作業を行い、現地調査後も詳細な検討が加えられるよう発泡ウレタンで遺構全体あるいは部分的に人骨を取り上げた。取り上げ後はクリーニングを行っている。現地では性別・年齢や埋葬姿勢の解明に重点を置き、詳細な検討は以後の整理に委ねた。

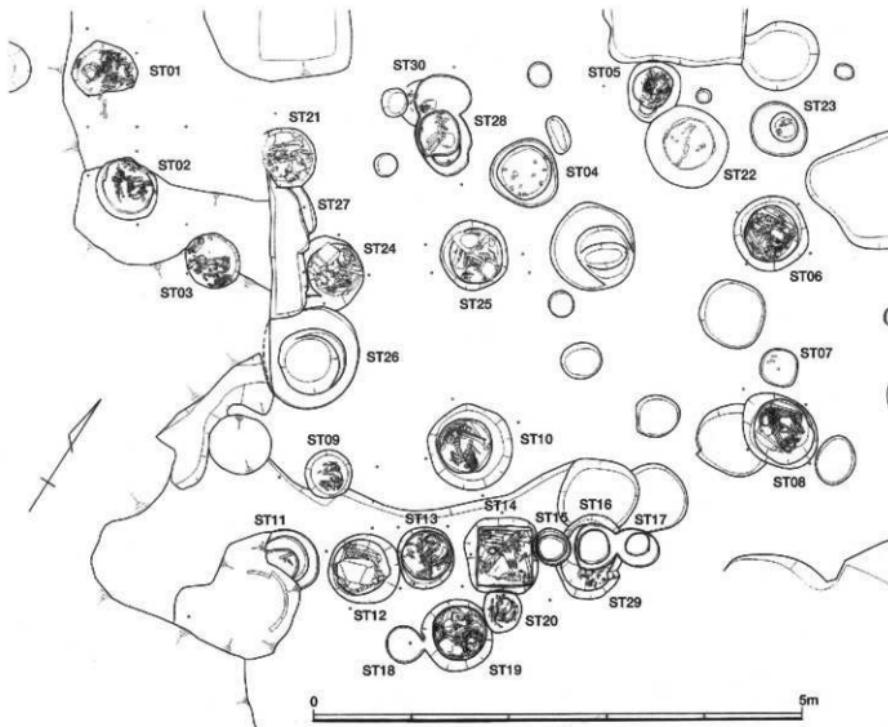


図7 近世墓群平面図

ST01 (図10、図版2-1)

墓域の北西端で検出。木質部は検出されなかったので直接埋葬された可能性もあるが、検出レベルが高いため地下水位の影響を受けずに木質部が残存しなかったものと思われる。骨の検出状況からでは、直径約54cmの桶が考えられる。上半部分の削平のため頭蓋骨も左半分は欠損しており、南東側は搅乱され墓壙外にも骨が散乱している。西を向いて埋葬され、前屈みに倒れこんで南に顔を向けている。出土状態での保存のため、詳細な観察はできていない。換歯は完了しており、歯冠の咬耗が比較的進行している。陶器磁や土師器は出土しているが、副葬品ととらえられる遺物は出土しなかった。

ST02 (図10、図版2-2)

墓域の北西で検出。ST01の南東側に隣接する。南側と東側は整地・段造成のため搅乱され、上面を削平されている。桶の側板と底板の痕跡が一部にあり、西側から圧力を受け若干変形している。出土状態で保存しているため、詳細な観察はできていない。頸骨、椎骨等が残存する。寛骨大坐骨切痕の角度はV字を呈し、男性と考えられる。北を向いて膝を曲げる姿勢をとっていたと思われる。

ST03 (図10、図版2-3)

墓域の北西で検出。ST02の東側に位置する。南側は搅乱されるが、側面と底面の一部に木質部が残る。掘形は不明瞭であるが、桶より数cm大きいものと思われる。右脛骨、右上腕骨などを検出した。出土状態を保ったまま保存しているため、詳細な観察はできていない。大坐骨切痕の角度からは、男性と考えられる。また換歯の完了した歯冠の咬耗は進行しており、成人と考えられる。西を向いて埋葬されており、北側底部で鉄鏃を検出した。また、水晶製と思われる数珠玉が8点出土している。

ST04 (図10、図版3-1)

墓域北辺中央あたりで検出。骨小片が散在し、土壤化したものがある程度である。指骨や頸椎、寛骨あるいは肩甲骨などがあるが、埋葬姿勢をうかがわせる元位置を示す資料はない。全体的に遺存状況はよくはないが、椎骨は成人のものと考えられる。掘形上層から焼烙1が出土している。

ST05 (図10、図版3-2、7-2)

墓域の北端で検出。南北にやや長い卵形の掘形をもつ。北側がわずかに搅乱される。南側には土師器火消壺2が存在する。破片が棺内の頭蓋骨下にも落ちており北側にも破片があるため、ST05があとに造営されたと考えられる。肩甲骨、肋骨などの位置から西を向いていたものと思われる。頭蓋骨に瘻合が見られること、萌芽直前の大臼歯がみられること、大腿骨の大きさなどから6歳前後の子供と思われる。底部近くで銅錢が5枚出土している。うち2枚は新寛永錢で、3枚は背面に「文」が鋳出された文錢である。直径はいずれも2.5cm。

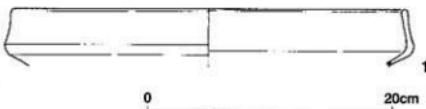


図8 ST04出土遺物実測図

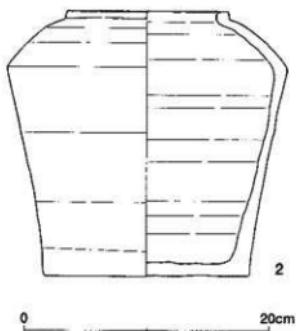


図9 ST05出土遺物実測図

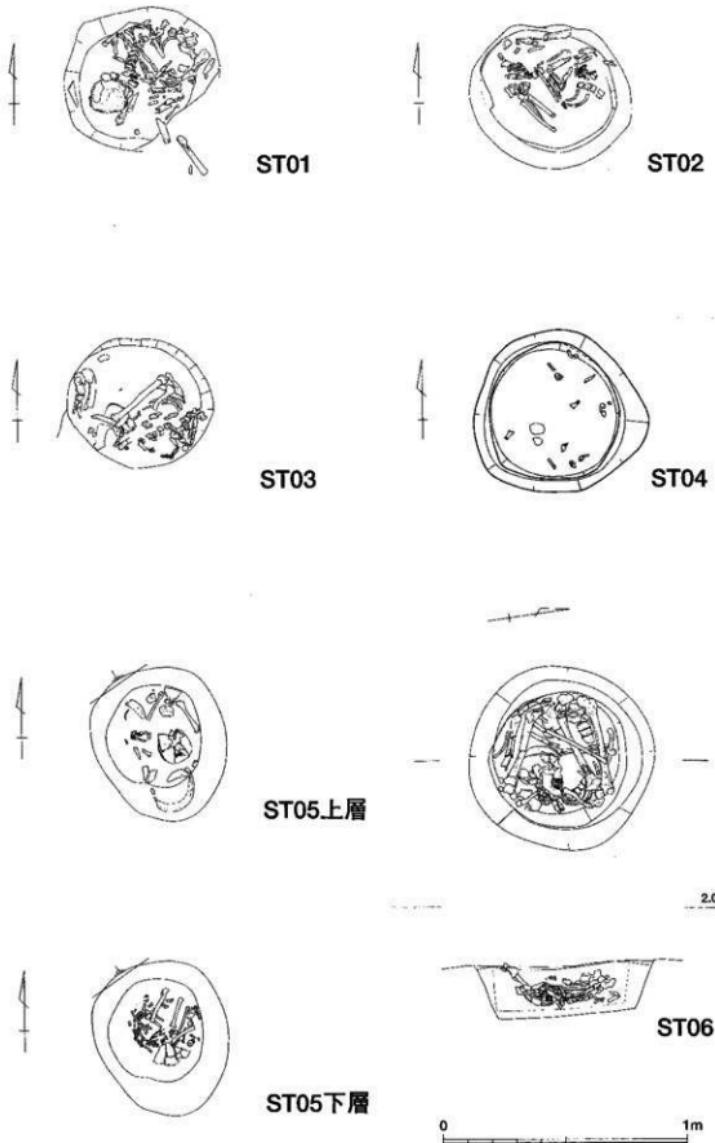


図10 ST01～06平・立・断面図

ST06 (図10、図版4-1)

墓域の東端で検出。棺内埋土は他の墓域とは異なり、淡黄褐色粗砂が主体となる。掘形埋土は濁灰色砂質土である。腰は西、頭は東に位置しており、西向きに埋葬され、前屈みに倒れこんで顔を北へ向ける。寛骨に見える大坐骨切痕の角度は、女性であることを示唆する。また、大腿骨の大転子・小転子の骨化は完了しており成人であることがわかる。左肘付近の指骨がまとまっている部分から煙管の吸口が出土した。右手に持たせたものであろうか。煙管は雁首も出土しており、18世紀後半と思われる。

ST07 (図11)

墓域の東端で検出。木質部は確認できなかった。墓壙の西側から骨片がわずかに出土したのみである。規模から幼児の墓と思われる。

ST08 (図11、図版4-2)

墓域の南東隅で検出。当初プラン検出を誤ったが、頭蓋骨を中心とした梢円形の掘形をもつ。比較的埋葬時の姿勢をよく残しており、頭は東で西を向き、腰は西、左下に倒れこむ。頭蓋骨の眉弓は低く、寛骨の大坐骨切痕の角度より、女性と判断される。また歯牙の咬耗は少なく、青年期にあると推測される。腰の辺りで手を組んでおり、その頭方、椎骨上で漆器と6枚で固まった銅鏡が出土した。銅鏡は直径2.2~2.4cmの新寛永錢である。また、芥子面が1点出土している。上層では、柿釉皿や上師器、瓦が出土したが、副葬と捉えられるものではなかった。

ST09 (図11、図版6-1)

墓域の南西部で検出。南側は小さな段差で切られる。木質部は確認できなかった。埋土は暗灰色砂質土。頭蓋骨は東側に位置し、西側に頸骨、上腕骨、尺骨などが存在する。墓壙の規模と、歯が全て乳歯であり、6歳以下の幼児と思われる。

ST10 (図11、図版5-1)

墓域の中央南寄りで検出。埋土は暗灰色弱粘性砂質土である。上部削平のため梢の残りが浅く頭蓋骨は残存しないが、北西側に腰、南東側に肋骨が位置する。椎骨・肋骨の残りが比較的よい。寛骨の大坐骨切痕の角度が丸いこと、大転子・小転子が骨化しており、成人した女性と思われる。

ST11 (図11)

墓域の南西隅で検出。西・南側は井戸により搅乱されている。桶の木質部が上下2段にわかれています。また東側に傾き斜めに歪んでいることから、埋納後に崩れてずれたものと思われる。肢骨が数本残るのみである。

ST12 (図12、図版5-2、6-2)

ST11の東隣で検出。上部に45×25cm大的花崗岩自然石が落ち込んでいた。その下に蓋板と思われる木質部が存在する。頭蓋骨は南側にある。股骨の状態から北側を向いていたと思われる。外後頭隆起・眉弓が発達していること、大坐骨切痕の角度が狭いことなどから、男性の可能性が高い。頭骨の縫合もかなり進行しているため、壮年以上の年齢が推測できる。また、この遺体の特徴としては、上肢骨は華奢な反面、大腿骨の骨幹後面に見られる筋粗線が柱状(ピラスター)に生長しており、脚の筋肉が発達していた個体と推定される。

副葬品は銅鏡と煙管が出土している。銅鏡は6枚出土しているが、固着して背面が見られるのみである。煙管の雁首は頭蓋骨付近で、吸口は肩甲骨下あるいは寛骨付近で出土した。

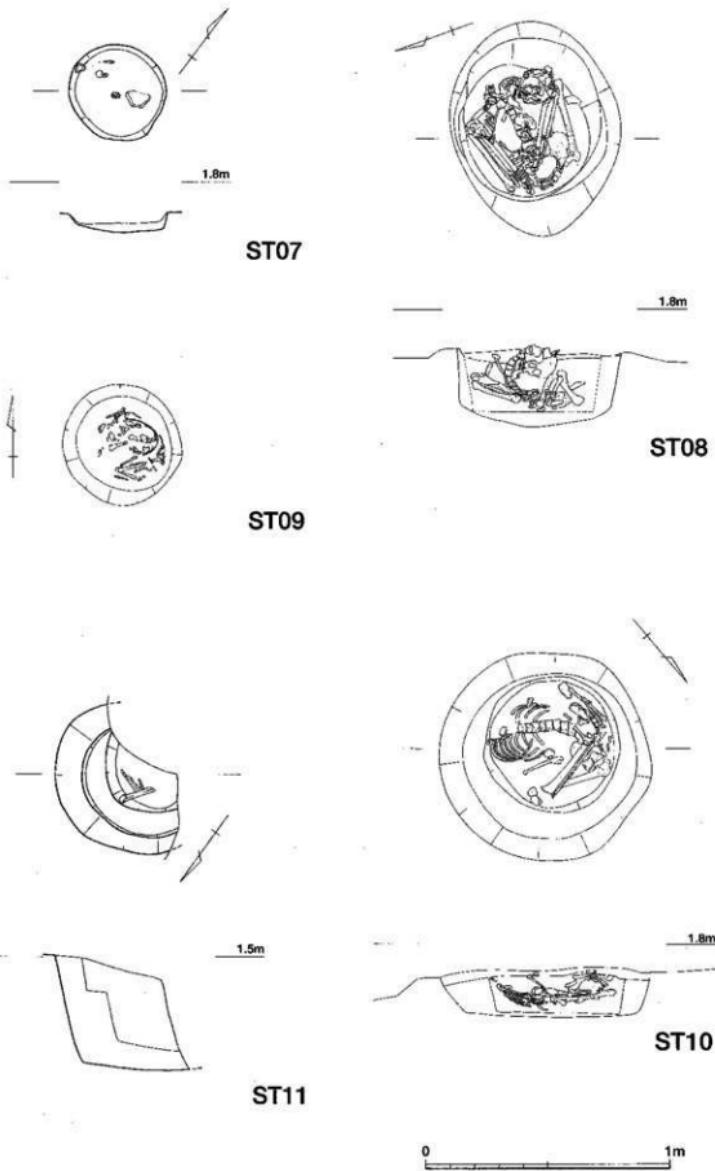


図11 ST07～11平・立・断面図

III 発掘調査の概要

ST13 (図12、図版5-2)

ST12の東隣で検出。蓋板がわずかに残る。頭蓋骨は西側に位置するが、寛骨や肋骨など他の骨の残存位置から西向きに座っていたと推定される。換歯は全て完了しており、成人であることがわかる。下顎の歯槽骨に吸収が見え、歯が浮いたような状況であることや、エナメル質減形成が見られることから推して、成長期に栄養状態が不安定であったことが伺える。性別については未詳である。

ST14 (図13、図版6-3)

墓域の中央南で検出。今回の調査で唯一の方形木棺である。ST15およびST20に切られているが、ST15についてはST14の存在は意識していたと思われる。南側に35×25cm大の花崗岩自然石があり、おそらく墓標的なものが落ち込んだのであろう。この石の上で幅8cmの板状木製品を検出した。蓋板の上に存在したと推定する石の上であれば、蓋板ではありえず、卒塔婆的なもの可能性がある。また、最下層で木棺の板の接合に使われていたと思われる釘を3本検出した。人骨は、北側にかたまって存在す

る。頭蓋骨は北隅、腰骨は西隅に位置する。

外後頭隆起が著しく、寛骨の大坐骨切痕の角度も狭いことから、男性であると判断できる。四肢骨は長大であり上腕骨の三角筋粗面が発達し、大腿骨骨幹後面の筋粗線がピラスターである。また下顎骨も強靭であり、おそらく高身長、筋肉質な成人男性であり、肉体労働に従事していた人物像が想像される。

副葬品としては短管が出土している。雁首は頭蓋骨西側直近から、吸口は頭蓋骨南西側から出土している。また肢骨上で漆器が出土している。



図12 ST12, 13平・立・断面図

ST15 (図14)

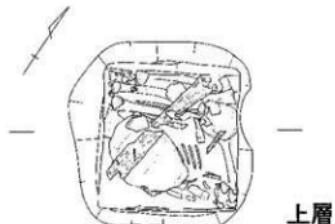
ST14の東隣で検出。桶の側板と底板の一部がごくわずかに残る。銅鏡 3 枚が出土している。新寛永鉄と文鏡が確認できた。漆器も出土しているが、明確な人骨は検出していない。

ST16 (図14)

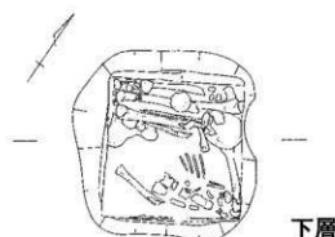
ST15の東隣で検出。ST17と埋形が重なるが、切り合ひ関係は確認できなかつたため、同時に造営された可能性もある。桶の側板と底板の一部がごくわずかに残る。人骨片がわずかに出土している。

ST17 (図14)

幕域の南東隅、ST16の東隣で検出。桶の側板と底板の一部がごくわずかに残る。桶内埋土は灰褐色砂質土である。人骨は検出されなかつたが、副葬品として磁器の小型猪口 3 が出土した。口径 4.7cm、器高 3.1 cm で、白磁釉のシンプルな品である。



上層



下層

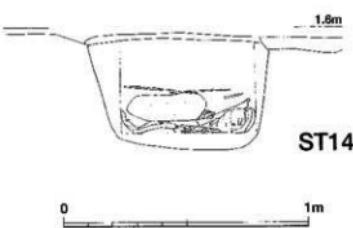


図13 ST14平・立・断面図

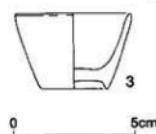


図15 ST17出土遺物実測図



図14 ST15~17平・断面図

III 発掘調査の概要

ST18 (図16)

墓域南端で検出。ST19の掘形を切る。桶の側板と底板の一部が残る。底板の上にほとんど土壌化した人骨があり、その上から銅鏡が6枚出土した。一枚は背面に文を鏽出す文鏡であり、との5枚は固着して詳細は不明であるが、新寛永鏡と思われる。

ST19 (図17、図版8-1)

ST18の東隣、ST20と挟まれるような位置で検出。第2大臼歯が歯冠のみ出土していることから、6～8歳の子供と推測される。この頭蓋骨の北側で鳥形土製品が出土した。生前に愛用した玩具なのであろうか。その東側からは銅鏡が6枚出土している。古寛永鏡が1枚入るが残りは新寛永鏡である。

これらの下には21～27cm大の自然石が3石あり、その下で成人骨を検出した。石と下層の人骨の間には蓋板と思われる痕跡が確認された。下層人骨は、前頭結節が隆起し、大坐骨切痕が広く、女性であると考えられる。また歯に鉄漿が観察でき、既婚であることも併せて判明している。頭蓋骨は頭頂部で非常に厚く縫合は緩い。歯の咬耗は比較的進行している。この2体はおそらく親子と思われ、子供が追葬されたものと推測される。

ST20 (図17)

墓域南端で検出。ST19の掘形を切る。桶は検出できなかった。頭蓋骨は北側にあり、その南側に肋骨、後肢骨などが位置する。頭蓋骨の大きさから、子供と推定される。切歯の換歯が完了していないため、4～6歳児であろうか。頭蓋骨の東側から漆器が出土している。

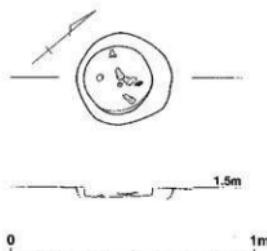


図16 ST18平・断面図



ST19上層



ST20



ST19下層



ST21

図17 ST19～21平面図



ST21(図17、図版7-1)

墓域の北西部で検出。陶器壺を埋葬施設とする。上層は削平されている。頭蓋骨を東、右寛骨が西に位置している。骨上に小疕が散見された。頭蓋骨の北西側にある左大腿骨は反転しているが、後世の搅乱を受けた結果かもしれない。後頭部には外後頭隆起が見え、大腿骨骨幹後面の筋粗線も発達することから、筋肉の発達した成人男性と判断される。

ST22(図18、図版7-2, 3)

墓域北東部で検出。陶器壺を埋葬施設とする。口縁部は欠損、後世に削平されたと同時に壺内部にガラが混入している。蓋状のものなど上部構造は不明。壺はやや東に傾く。壺4の大きさは最大径54.3cm、現存高65cmである。底部内面に長方形の目跡が5箇所ある。

陶器棺であったためか、時期的なものか、比較的人骨の残りがよい。全体的印象として、華奢な人物が想像される。四肢骨も細く短く、筋粗面も未発達である。頭骨の縫合は癒合が進み、壮年以上の年齢が推測できる。また外後頭隆起は低く、眉弓隆起も低いが、前頭骨節が半坦であり、寛骨の大坐骨切痕が狭いこと、また恥骨下角も鋭角であり、総合的に見て老年に近い小柄な男性であることを示唆する。

副葬品は煙管や数珠玉が出土している。煙管は直線的な肩部と方形の火皿をもつ雁首と、長さが約10cmと大型である吸口が出土。19世紀に位置づけられる。また、ガラス製や木製などの数珠下も出土している。

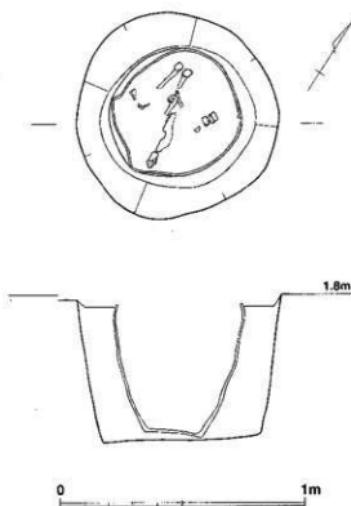


図18 ST22平・断面図

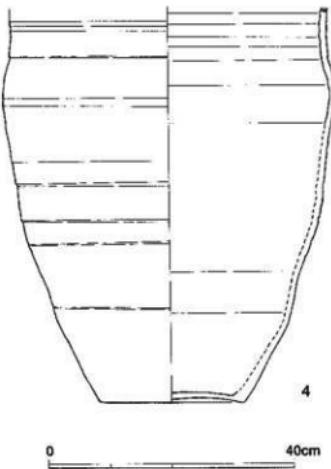


図19 ST22陶器棺実測図

III 発掘調査の概要

ST23 (図20)

墓域北東隅で検出。桶はうすらと検出できた。おそらく幼児と思われる人骨片と銅銭が6枚出土している。銅銭は、古寛永銭が1枚と新寛永銭が2枚は確認できた。

ST24 (図21、図版8-2,-3)

墓域西部で検出。ST26に切られ、一部擾乱のため削平される。人骨は土壤化が著しい部分があり、図化にあたっては一部簡略化した。一石五輪塔が横倒しで出土したが、棺内の底部に骨が集中しており、ある程度土がたまつてから五輪塔が落ち込んだようである。頭蓋骨は北側で右下に倒れこんどおり、頭蓋骨西側で肩甲骨や肋骨、南側で尺骨、上腕骨、胫骨などを検出した。換歯は完了し、外後頭隆起が高いことなどから成人男性と思われる。墓壙南端の大腿骨直上から土器器皿が出土している。一石五輪塔5は、花崗岩製で、空・風輪と火輪の一部を欠く。現存高37.5cm、幅16.2cm。

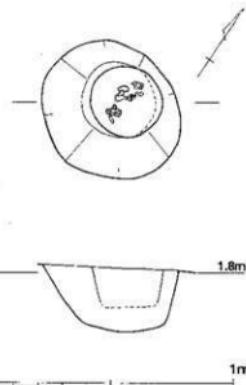


図20 ST23平・断面図

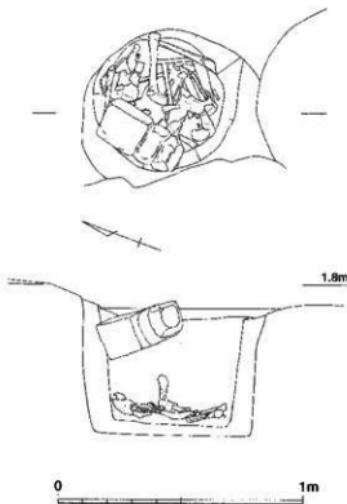


図21 ST24平・立・断面図

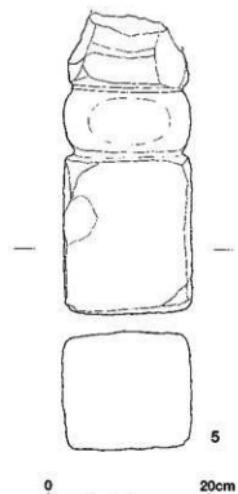


図22 ST24出土一石五輪塔実測図

ST25 (図23、図版 9-1)

墓域中央部で検出。上層には切石状の石を含む自然石が2石存在する。棺は側面に木質部が残る。頭蓋骨は南、仙骨・腰椎は北に位置しており、北を向いていたのである。歯からは鉄漿が確認された。これは蛍光X線分析において、同人骨の他の部位、また他の人骨の歯との比較分析の結果、鉄(Fe)が高く検出されたことで判断された(注1)。また、頭骨の特徴として、眉弓、外後頭隆起が低く、前頭骨節に隆起が見られることなどから、既婚の成人女性であることがわかる。副葬品は、ガラス製や水晶製と思われる数珠玉が4点出土している。

ST26 (図23、図版 9-2)

墓域西部で検出。桶の残りが比較的よく、蓋板も存在する。蓋板は東西方向に木目があり、すべて北内側に落ち込む。桶の残り具合に比べ、人骨は最上層で破片がわずかに出土したのみで、棺内には骨は残存していなかった。

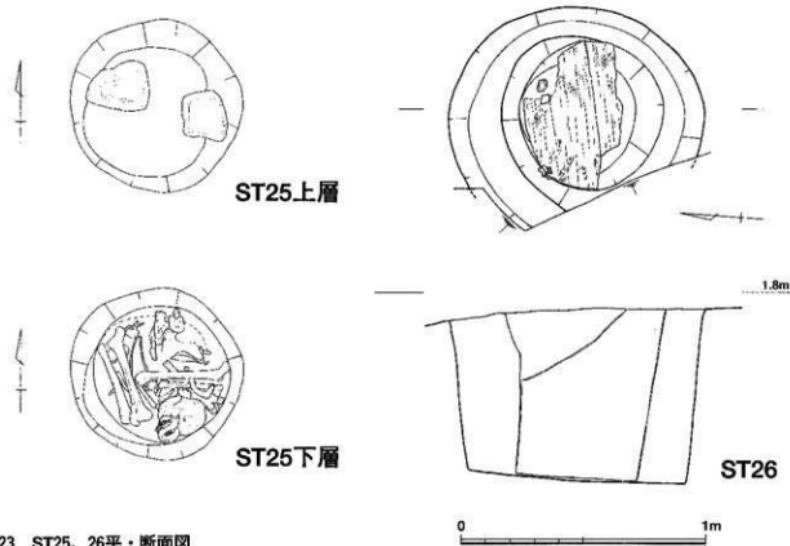


図23 ST25, 26平・断面図

ST27 (図24)

墓域西部のST21~24間で検出。ST21に切られていることと、攪乱が著しいため詳細は不明である。人骨は東端で肢骨がわずかに出土したのみである。西側の攪乱坑内より・石五輪塔が出土した。出土状況に多々疑問が残るが、ST27に付属するものとして取り扱っておく。・石五輪塔6は、砂岩製で、空風輪が欠損しおり現存高29.8cm、幅12.4cmを測る。水輪の上下の境にはノミ痕が見られる。

注1 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所保存修復科学研究室のご協力による。

ST28 (図26)

墓域中央北側で検出。ST30との切り合いが不明瞭である。頭蓋骨と肢骨が出土している。性別については骨の遺存状態が悪いため定かではないが、下頸骨が相対的に重厚であり、男性の可能性が高い。また右下頸の親知らず（第3大臼歯）が激しく咬耗しており、加齢によるもの、もしくは歯を酷使する職掌にあった人物と考えられる。親知らずのあることから成人骨である。

ST29 (図26、図版9-3)

墓域中央南側、ST15～17に切られる形で検出。桶は北から押され南側へ大きく傾く。頭蓋骨はないが、肢骨の状態から北西方向を向いていたと思われる。骨の遺存状態は悪い。歯牙は全て換歯を終えている。また、歯冠の咬耗は少なく、比較的若い個体であろう。また下肢骨は華奢であり、女性の可能性もある。右脛骨下から銅鏡と陶器碗が出土している。陶器碗7は口径7.6cm、器高5.7cmで、体部外面に淡黒褐色の釉でハケ目がはいる。銅鏡は5枚出土しており、直径2.3cm～直径2.5cmの新寛永鏡である。

ST30 (図26)

ST28の北西側で検出。輪郭は明瞭でないが、本来の墓壇はもう少し西寄りに存在したようである。頭蓋骨と肢骨が出土している。

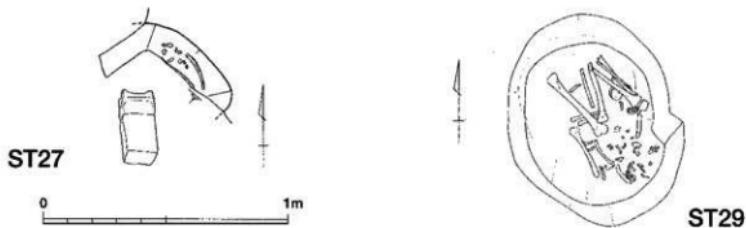


図24 ST27平面図

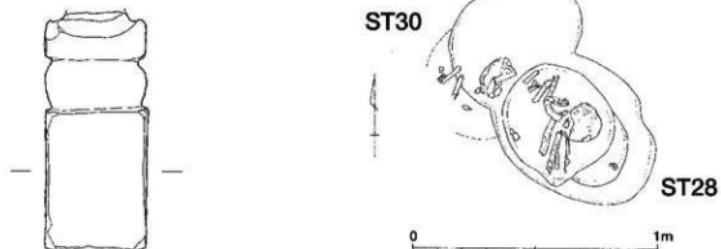


図26 ST28～30平面図

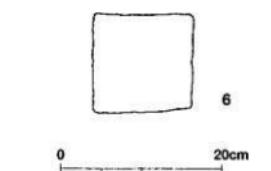


図25 ST27出土一石五輪塔実測図

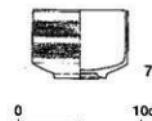


図27 ST29出土遺物実測図

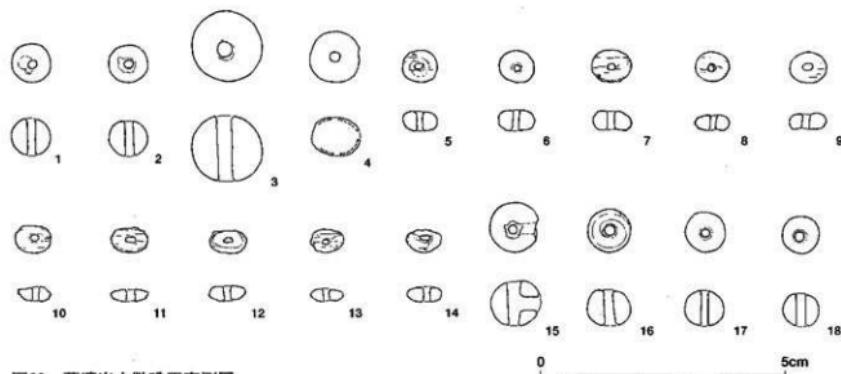


図28 墓出土数珠玉実測図

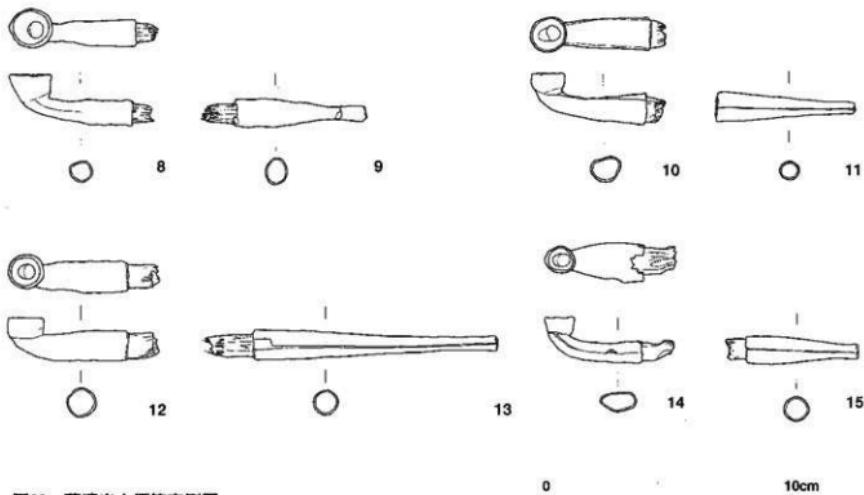


図29 墓出土煙管実測図

表1 墓出土数珠玉一覧

標印番号	基盤番号	直径 mm	孔径 mm	重量 g	材質
図28-1	ST08	8.48	1.63	0.76	木晶
図28-2	ST03	8.19	1.77	0.61	木晶
図28-3	ST22	14.08	3.26	5.17	木晶
図28-4	ST12	10.66	2.86	0.93	木晶
図28-5	ST22	7.78	1.45	0.11	木
図28-6	ST22	7.35	1.32	0.14	木
図28-7	ST22	8.17	1.27	0.07	木
図28-8	ST12	6.97	1.38	0.06	木
図28-9	ST22	7.01	1.58	0.03	木
図28-10	ST22	7.19	1.22	0.03	木
図28-11	ST12	7.53	1.63	0.03	木
図28-12	ST12	7.89	1.06	0.05	木
図28-13	ST22	6.64	0.98	0.02	木
図28-14	ST22	7.29	1.01	0.03	木
図28-15	ST25	11.16	1.99	1.61	ガラス
図28-16	ST25	9.05	2.6	1.12	ガラス
図28-17	ST25	6.74	1.81	1.09	木晶
図28-18	ST25	7.8	1.9	0.8	ガラス

表2 墓出土煙管一覧

標印番号	基盤番号	部材	長さ mm	底径 mm	最大内径 mm	最大外径 mm
図29-6	ST14	吸管	54	21	14	12
図29-9	ST14	吸管	53	21	12.5	12
図29-10	ST12	吸管	51	21	12.5	12
図29-11	ST12	吸口	37	—	—	—
図29-12	ST22	吸管	49.5	18	12	12
図29-13	ST22	吸口	94.5	—	—	12.5
図29-14	ST06	吸管	49	19	10	12
図29-15	ST06	吸口	46	—	—	12

表3 近世墓一覧

墓號番号	形式	棺形規模		年齢	性別	頭位	副葬品		その他
		径	深さ cm				数珠下数	通管	
ST01	円形木棺	60~67/27	54?	成人	男性	東			石
ST02	円形木棺	61~68/15	58/15	成人	男性	南			
ST03	円形木棺	—	54~60/41	成人		東			
ST04	円形木棺	67~73/26	54~57/25	成人					
ST05	円形木棺	55~63	39~42/(15)	幼児					
ST06	円形木棺	73~77	54~57	成人					
ST07	円形木棺	39~41/13	—	幼児?					
ST08	円形木棺	48/14	58~67	青年?					
ST09	円形木棺	85~90	56/	成人	女性	東			
ST10	円形木棺	(65)~(47)	(51)~39	成人?	幼児	東			
ST11	円形木棺	72~74/50	55~57	壮年~	男性	南			
ST12	円形木棺	—	49~51	成人					自然石
ST13	円形木棺	75*77	56*60	成人	男性	西			
ST14	方形木棺	37~40	21~36/7	幼児?					
ST15	円形木棺	45~49	33~36/20	幼児?					
ST16	円形木棺	41~48	21~27/14	幼児?					
ST17	円形木棺	37~40	28/(5)	幼児?					
ST18	円形木棺	73~75	54~56	子供					
ST19	円形木棺	39~44	—	成人	女性	東			
ST20	陶器棺	82~85/58	—	子供					
ST21	陶器棺	54~61/28	29~17	成人	男性	東			
ST22	陶器棺	72/	56~58	壮年~	男性				
ST23	円形木棺	68~70/	54~56/	幼児?					一石五輪塔
ST24	円形木棺	105	59~61/	成人?					自然石
ST25	円形木棺	—	—	成人?					
ST26	円形木棺	—	—	成人?					土人形
ST27	円形木棺	55~70	41~43	成人	男性				石五輪塔
ST28	円形木棺	70~87/	55~67	成人	女性?	南			
ST29	円形木棺	—	—	成人					
ST30	—	—	—	—	—	—	—	—	—

3 建物・土坑

SB01 (図30)

VI区南半で検出。東側は調査区外に伸びるため不明であるが、東西2間×南北4間分を確認した。柱穴は、おおむね直径約40cm、深さ約25cmである。検出した10基のピットのうち6基から、20~30cm大の平らな面をもつ礎石が出土した。遺物は、SP99から土師器皿、SP103から上師器皿、SP98からは柿釉灯明皿・一重網日の染付碗・陶器・焰燈などが出土している。時期は出土遺物から18世紀後半と思われる。

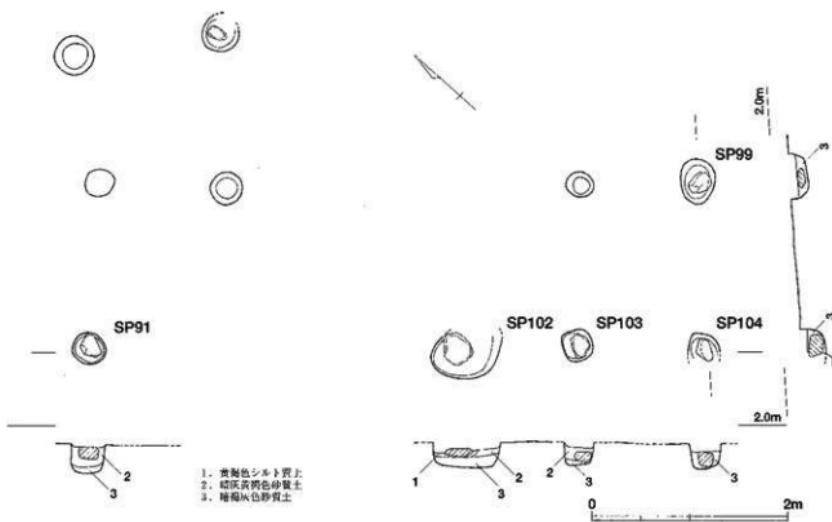


図30 SB01平・断面図

SP94

VI区北半で検出。直径28cm、深さ18cmのピットで、埋土は暗灰褐色砂質土である。蓋をされたままの土瓶が正位置で出土した。

施釉陶器の落し蓋16は、器径10.3cm、器高2.5cm。底部は平底、口縁部は外方斜め下に折り曲げ、中央部に耳環状のつまみを貼り付ける。口縁端部から内面は施釉されオリーブ褐色に発色する。施釉陶器土瓶17は、口径9.3cm、器高11.1cm。算盤玉形の体部をもち口縁部は直立する。弦の取付部を2箇所貼り付け、底部に三足をもつ。弦もごく一部残存していた。外面体部下端から底部以外は施釉されオリーブ灰色に発色する。外面体部上半にはイッチン描きと鉄釉による施文がある。19世紀と思われる。

SK44 (図32、図版10-2)

II区南端で検出。長径122cm、短径78cm、深さ52cmで灰色細砂質土と暗灰色粘性砂質土を埋土とす

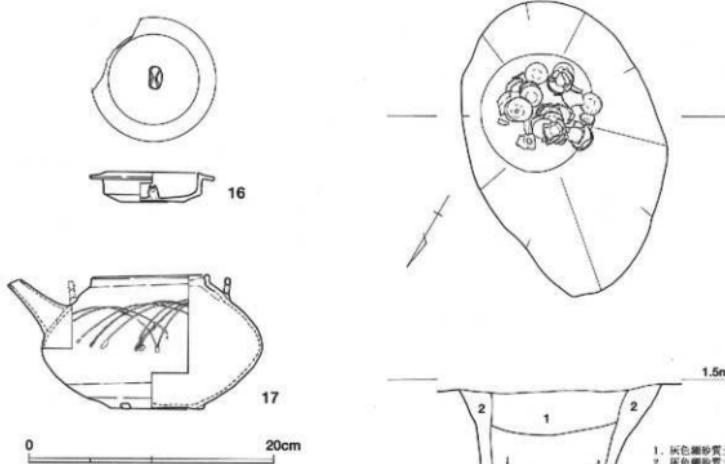


図31 SP94出土遺物実測図

る。上層から陶磁器・瓦などが出土し、下層から21~23の磁器染付碗とともに土師器の灯明皿が数枚ずつ重ねられた状態で出土した。

土師器皿は大小2タイプがあり、小型の18は口径8.1cm、器高1.5cmで、この1個体のみ出土。大型の19は口径10cm、器高1.8cmで、33個体以上出土した。いずれも口縁部に煤が付着する。20は陶器壺で口径10cm、器高12.2cm。口縁部内面から体部下半にかけて灰緑色の釉がかかる。底部外面は無釉。丹波焼と思われる。21~23は染付碗。21は口径7.8cm、器高4.2cmで、外面に草花文を施す。22は上半が欠損している。外面体部下半から高台にかけて界線が3条めぐる。23は口径11.2cm、器高6.2cmで、外面は青磁釉、内面見込みに五弁花文、内面口縁部に斜格子文を配する。24は染付皿で、口径13.9cm、器高3.3cm、体部内面は2条の界線と草花文、見込みは蛇ノ目釉剥ぎで中央に五弁花文。

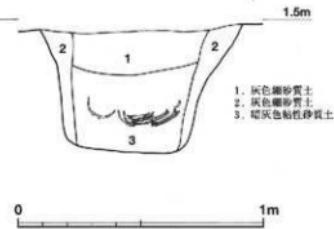


図32 SK44平・断面図

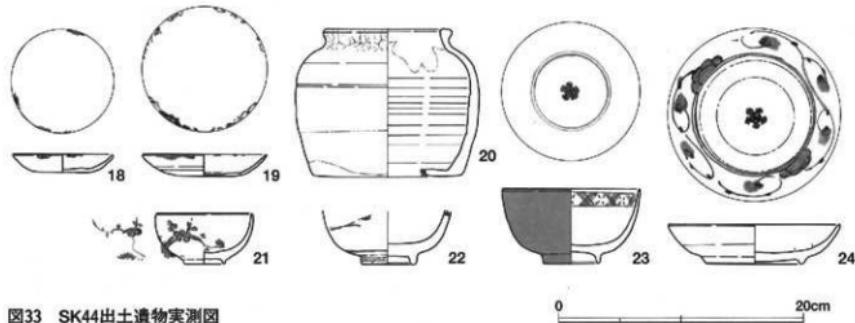


図33 SK44出土遺物実測図

SK115 (図34、図版10-3)

V区南端で検出した落ち込み。長さ4.3m、幅2.9m以上、深さ38cmの不整方形。土師器や陶磁器、瓦などが出土した。18世紀から19世紀前半のものと思われる。

25は土師器焰烙で、口径24.2cm、器高6.2cm、口縁部外面はヨコナデ、底部外面はヘラ削りである。17世紀末から18世紀後半の所産か。26は施釉陶器壺で、口径14.1cm、器高21.8cm、頸部に1条の波状文、体部に弱い凹線を2条施す。外面は緑褐色釉で、頸部・肩部から深緑色釉を流し掛けする。27は小型の施釉陶器壺で、口径4.6cm、器高8.8cm、外面の体部下端と底部以外は鉄釉。28は施釉陶器鉢で、口径11cm、器高11.7cm、口縁部上端は平に削る。外面体部下半から底部にかけてと口線上端面以外は鉄釉を施す。29は陶器播鉢で、口径36cm、内面には1単位11条の播目が入る。30は染付碗で、口径9.6cm、器高5.1cm、体部外面は菊花文と草花文で、高台部に2条の界線が入る。高台内面も施文。31は染付碗で、口径9.8cm、器高5.1cm、体部外面に草花文、高台から体部下端には3条の界線が入る。高台内に草花文。32は染付碗で、口径9.6cm、器高5.2cm、体部外面に草花文と高台部に2条の界線。33は染付碗で口径9.9cm、器高5.1cm、体部外面に草花文、高台部に2条の界線。34は染付碗で、口径11cm、器高4.9cm、体部外面にコンニャク印判による菊花文、体部下端から高台にかけて3条の界線。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。35は染付碗で、口径10.4cm、器高5.4cm、体部外面は菊花文、体部下端から高台にかけて3条の界線。36は染付碗で、口径10.8cm、器高5.3cm、体部外面に草花文、高台部に3条の界線。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。37は染付蓋で、口径9.7cm、器高2.7cm、外面は青磁釉で、内面は

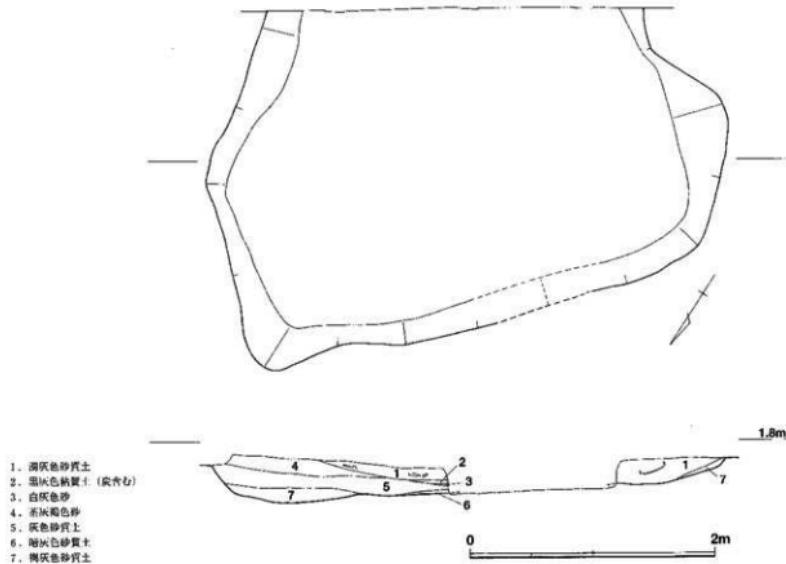


図34 SK115平・断面図

口縁部に菱形文、2条の界線を挟んで中央に五弁花文を施す。つまみ内面には渦福文。38は染付筒型碗で、口径8.6cm、器高6.7cm、外面は青磁釉、口縁部内面に菱形文、見込みには2条の界線と中央に五弁花文を施す。高台内には渦福文。39は染付皿で、口径10.1cm、器高2.8cm、口縁部内面は半裁菊花文と斜格子文、2条の界線があり、中央に五弁花文。外面は体部に唐草文と高台部にかけて3条の界線、高台内には1条の界線。40は染付輪花皿で、口径21.7cm、高さ2.9cm、内面は口縁部に草花文と鱗文、見込みに雲文、外面は雲文と体部から高台にかけて3条の界線、高台内は1条の界線と中央部にも施文が一部見られる。41は染付仏龕具で、口径7.4cm、器高5.2cm、脚部下半から底部にかけては無釉。外面には雨降文と体部下半に界線。脚部には濃緑青色の帯状の施釉が見られる。

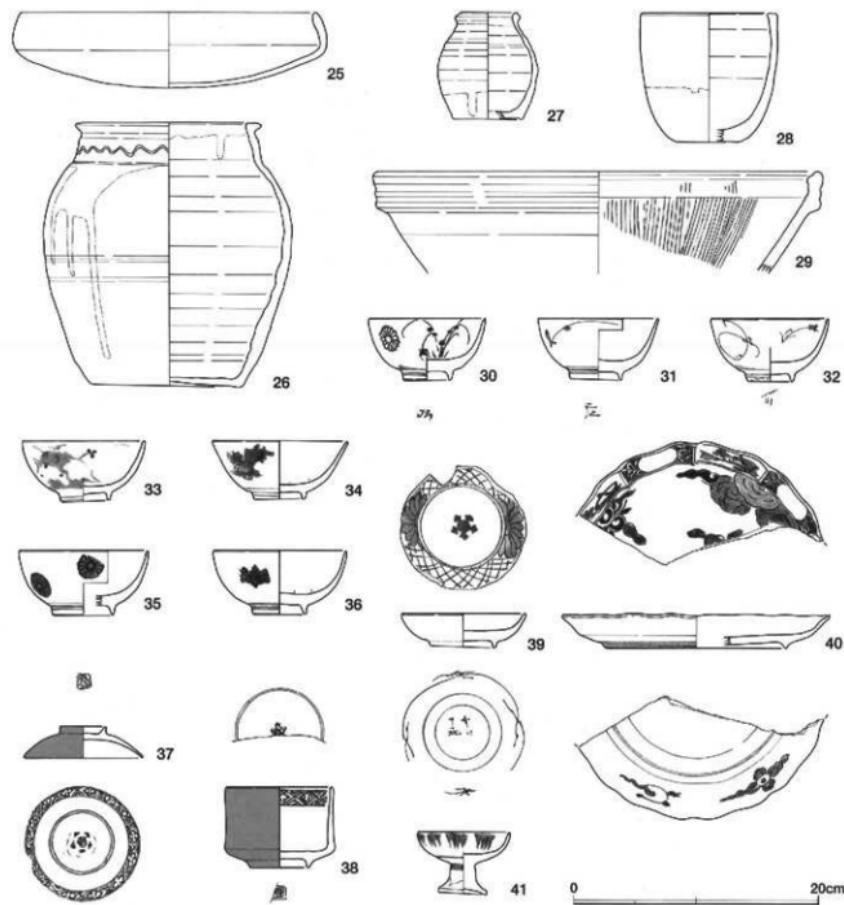


図35 SK115出土遺物実測図

4 中世の遺構

中世の遺構は、最終面である褐色砂層上で検出した。土坑、溝、井戸などがある。I区は特に搅乱の影響が著しく、II・V区は近世の遺構面ともなっているため、残存状況は悪い。

SE02（図37、図版11-3）

V区南西部に位置する石組井戸。最終面である褐色砂層上で検出した。掘形規模は径約1.8～2.1m、深さ約1.4mである。石組の井戸枠規模は内径約75cm、残存高約35cmで2段分が残る。石組より下には水溜状のくぼみがあるが、曲物や桶などの水溜施設は存在しなかった。標高約0.55mで湧水点に達する。

遺物は、土師器、陶器、瓦などが出土している。42は土師器皿で、口径8.4cm、器高1.9cm、糸切り底である。43は陶器擂鉢で、口縁部下端は下部に拡張する。擂臼は6条以上。備前焼と思われる。唐草文軒平瓦44は水返しがつく。唐草文軒平瓦45は、上外縁幅1cm。波状文軒平瓦46、47は、上縁幅は約1.3cm、下縁幅約0.9cmである。

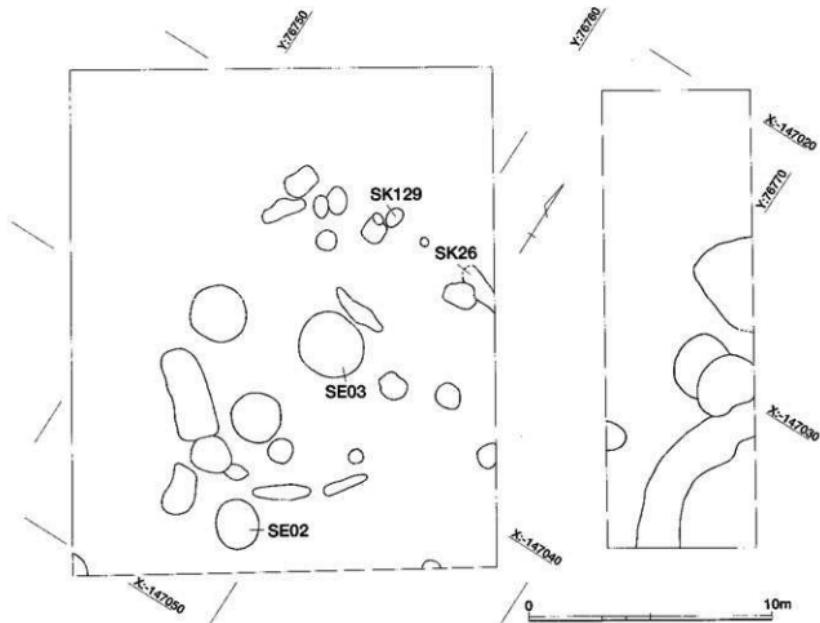


図36 中世遺構配置図

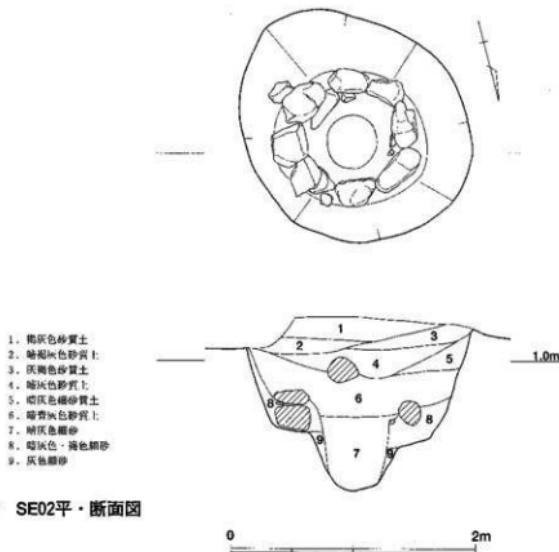


図37 SE02平・断面図

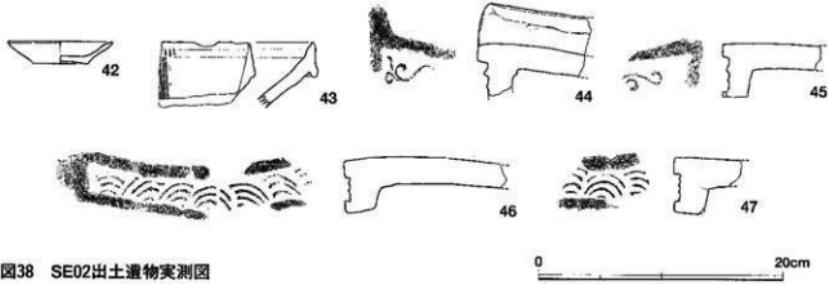


図38 SE02出土遺物実測図

SE03 (図39、図版12-1, 2)

V区中央東に位置する石組井戸。同じく最終面である褐色砂層上で検出した。掘形規模は直径約2.7m、深さ約1.3m。石組の井戸枠規模は内径約80cm、残存高約25cmで2段分が残る。石組の下端部より下で桶による水溜施設を確認した。水溜の規模は直径約70cm、深さ約55cmである。湧水点は標高約0.55mである。

遺物は、瓦、白磁などが出土している。巴文軒丸瓦48は、焼瓦である。巴文軒丸瓦49は、外縁幅2.2~2.3cm、珠文の数は20と推定される。巴文軒丸瓦50は、直径は約15.2cm、外縁幅は2.2~2.4cm、珠文の数は20と推定される。波状文軒平瓦51は、瓦当上縁が幅約4.5mmで面取りされる。波状文軒平瓦52は焼瓦で、上縁幅0.6cm、下縁幅1.1cmである。波状文軒平瓦53は、上縁幅0.65cm、下縁幅1.2cmである。

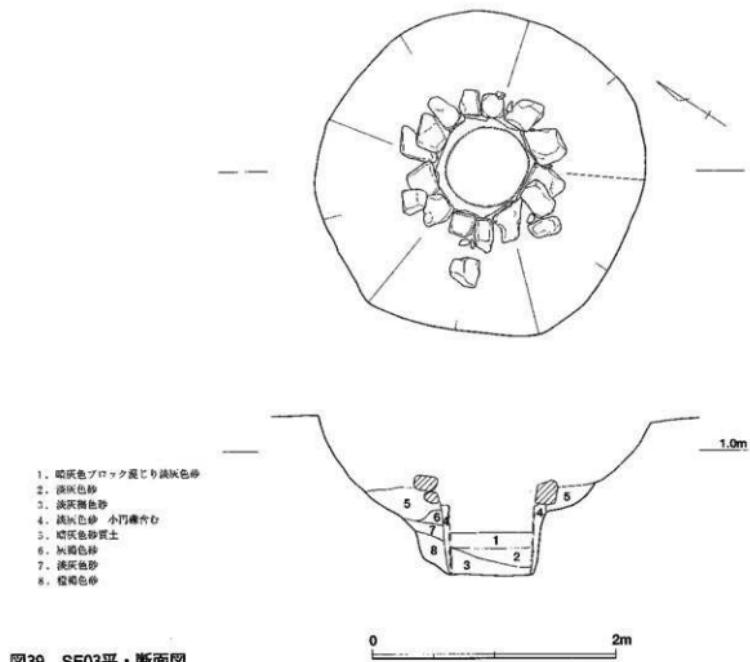


図39 SE03平・断面図

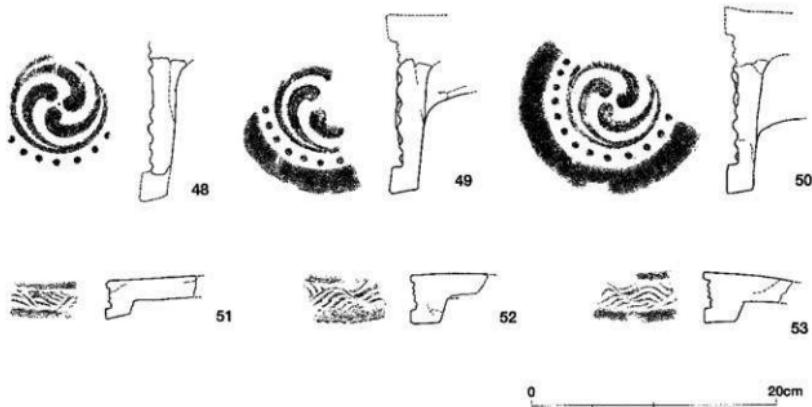


図40 SE03出土遺物実測図

SK129 (図41、図版12-3)

V区北半東で検出。最終面の淡褐色砂をベースとし、埋土も同様な土質でプランは明瞭ではない。底部を打ち欠いた羽釜を2段重ねで構築している。当初は土坑として検出したが、形態から井戸として使用されたものと思われる。ただし現在では涌水点に達していない。

54は口径29.1cm、残存高27cmで、口縁部には段をもち、やや斜め上に上がる鈍がつく。55は口径29.6cm、残存高25.2cmで、口縁部に段をもつ。両個体とも内面は丁寧な調整をされているが、鈍は破損して煤化痕も著しい。よく使用されたのち、再利用されている。

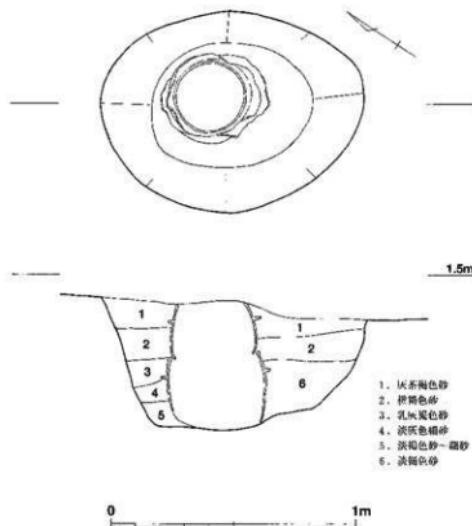


図41 SK129平・断面図

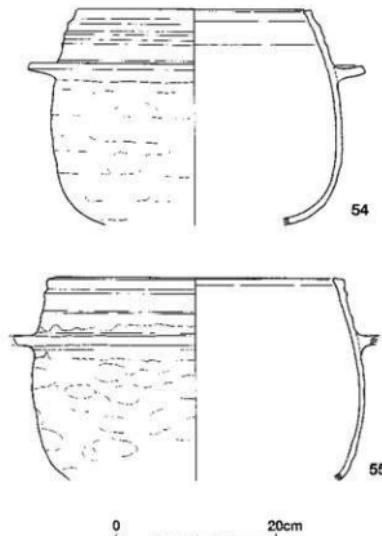


図42 SK129出土遺物実測図

SK26

II区中央東端で検出した土坑。上部器鍋や上部器小皿の他に丸瓦・平瓦が出上した。巴文軒丸瓦56は、外縁幅約2.2cm、珠文数は20と推定できる。この瓦には瓦当部上面から体部にかけて縦方向にヘラがきによる「兵□[座カ]」の線刻がみられた。「兵」の下に「まだれ」と思われる部首の第2画までを確認でき、素直に読めばおそらくは「兵庫」と思われる。

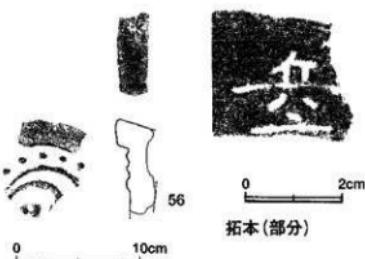


図43 SK26出土瓦実測図

IV 近世墓について

埋葬形態・埋葬施設

このたびの発掘調査では、30基を数える近世墓を検出した。埋葬施設は円形木棺（いわゆる早桶）が主体であり、1基が方形木棺、2基が陶器棺となる。

円形木棺は、遺存状態は良好とは言えず、ごくわずかに側板や底板の半ば土壌化した痕跡が認められた程度であったが、直径を測るとほぼ30cm前後と56cm前後の2種が存在する。小さいタイプは、ST05の例のように小児用と考えられる。

方形木棺（櫛）はST14の1基のみである。今回の調査の中では特異な形態をとるため、他の被葬者との差を意識していたのであろう。

陶器棺には通常上部構造として切石や木製の蓋が存在する。江戸における発掘調査例では、蓋石として切石を平行に2ないし3枚のせられていた例があるが、本調査では攪乱・削平のためどのような蓋がされていたかは不明である。

その他ST05からは火消釜が出上した。藏骨器とも考えられるが、骨・遺灰・副葬品等は確認されておらず、墓と断定はしていない。兵庫津遺跡第36次調査や伊丹市伊丹郷町遺跡などの調査例では、土葬墓から火葬墓への変化がとらえられているが、本調査例は火葬墓が一般的になる以前の段階とも思われる。

一石五輪塔が出上した墓は、ST24とST27である。いずれも、墓の上に据えられていたものが、蓋板の腐朽に伴い墓坑内に落ち込んだものと思われる。その他、自然石が出土した墓も、ST12・ST14・ST19・ST25の4基が確認される。すべてが墓標的役割を果たしていたものとは言い切れないが、墓の存在を示すものとして設置されたものもある。またST14では、石の上から板状のものが出土しており、卒塔婆とも考えられる。

埋葬肢位

埋葬姿勢は、基本的には膝を曲げた坐位と思われる。これは早桶への一番効率的な埋葬方法であるが、ST06、08、10など、やや仰臥姿勢になる例も見受けられる。座位の姿勢から腐敗する前に腰がずれて動いたのか、元からこの姿勢で埋葬されたのか、調査段階では確認する材料を得ることができなかった。

表3では頭蓋骨の元位置を頭位として記載した。東すなわち西向きが12例、南すなわち北向きが5例ある。1例だけST14が東向きであるが、埋葬施設とともに特異な存在として理解される。

副葬品

ただ単に上師器や瓦片などの遺物が出土しただけではなく、明らかに副葬品ととらえうるものが出上したのは14基を数える。副葬品の種類は銅錢・数珠・煙管・漆器・土製品である。銅錢と数珠は宗教的意味合いが強く、煙管や土製品は生前の愛用品といえる。

銅錢は8基から計13枚が出土した。そのうち5基からはきっちり6枚ずつ出土しており、まさに六道錢である。銅錢は全て寛永通寶で、古寛永錢は現在3枚が確認されているが、いずれも新寛永錢と共に伴している。

数珠はST03・ST22・ST25から確認された。材質はガラスあるいは水晶、木である。ST25出土数珠には、T字形に穿孔があり、房を取り付ける部分の親珠とみられる。ST03は切り取り保存した人骨

間にも 6 個確認されており、さらに精査すればその数が増える可能性はある。

煙管は 4 例あり、すべて雁首と吸口がセットになって出土している。副葬されていたのはいずれも成人で、ST06 は女性、その他は男性と考えられている。銅鏡と煙管が同時に出土しているのは ST12 のみであるが、銅鏡は固着して背面を向いているため詳細な時期はわからない。

ST19 からは鳥形土製品が出土している。子供の骨に共伴して出土しており、まさに生前の愛用品であった可能性が高い。また、ST08 からは芥子面が 1 点、ST26 からは十人形の一部が出土している。

墓域・配列について

墓壙は、調査区北西部に集中して検出しており、ある程度限られた空間の中で造営がなされている。ただし、切りあつたり接したりして存在する例は少なく、比較的整然と計画性をもって埋葬されていたようである。

まず墓域の範囲を推定してみたい。北側は、南北方向も墓壙が等間隔で配置されていたとすると、その間隔では検出した墓壙から北には存在しないため、ST01~05 のラインまでと考えられる。東側は ST08~23 のラインから以東、南側は ST18~20 から以南にはそれぞれ墓壙が存在しないため、ここが東限・南限となる。西側は搅乱および調査区外になるため不明であるが、さらに西側に広がる可能性は残されている。したがって、現在判明している限りでは、東西約 7.5m、南北約 7m の範囲が考えられる。

墓列は、大まかに見れば現在の区画街路に沿って北東~南西方向に 5 列認められる。各墓壙の細かな時期までは確定できていないため、どの列から造営されていったか順番は不明である。

特徴的なものは、南端に位置する ST11 から ST20 までの墓壙群である。一部切り合を持ちながら密集して営まれており、あたかも方形木棺である ST14 を中心に配列しているかのような印象を受け、家族的な紐帯をもった人々が埋葬されていたのであろうか。なかでも ST15~17, 29 と ST18~20 は同じような埋葬形態をとっている。

ST15~17 は小型の桶状の木質痕が確認されたが、人骨・副葬品はほとんどなく、幼児のものと考えられる。その下層に ST29 が存在しており、成人の墓を中心に幼児の墓が 3 つ並んだ形態である。

ST18~20 は他の墓列とは方向がややずれるが、やはり ST18 と ST20 は中心の ST19 に添うように配列されている。ST18・20 とも骨片が少なく明瞭ではないが、幼児の墓と思われる。ST19 は 2 体埋葬されており、その上部で検出された ST19-1 は子供の骨で、下層の ST19-2 の被葬者ときわめて繋がりの強い家族・血縁関係があったことがうかがえる。切り合い関係から ST19 が先行しその後 ST18・20 が造営されており、ここでも成人の墓を中心に幼児の墓が 3 つ並んだ形態がみられる。

なお、年齢・性別による配置等は、人骨の分析が進んでいないため、明確にはできなかった。

「元禄絵図」では、龍呂寺は西側に門があり東側に堂宇が存在するように描かれている。想像をたくましくすれば、西の門から入り、調査区南半を通って本堂へ。その左手に墓地があつたのであろうか。

被葬者

被葬者の年齢は人骨と棺の規模から、性別については寛骨の状況から判断している。幼児は骨の発達が未熟であるため残存率が悪い傾向がある。棺の大きさから判断した場合が多い。成人は推定も含めて 21 基である。性別が確定できたのはいずれも成人骨で、男性 7 基、女性は 6 基である。

さて、本調査で確認された墓の被葬者はどういった階層の人々であったのであろうか。墓誌・墓標がなく、具体的な人物名を示す資料はないため、墓の形態および副葬品から類推せざるを得ない。

近世江戸城下町では、一般的に豪華な木棺は武士階級、木棺は町人層とされているが、今回の調査では副葬

品の面からでは壺棺と木棺とで被葬者層が異なる結果は得られていない。陶器棺であるST22出土の副葬品からは若干新しい要素も見られるため、兵庫津遺跡第36次調査の例と同様、円形木棺から陶器棺へと移行した時期差ととらえておきたい。1基確認された方形木棺は、特別な埋葬施設とそれを取り両むように墓が比較的密集していることから、家族の民と被葬者を考えることができよう。

周辺に現存する墓地から類推することや、文献からの調査も必要であろうが、そこまではなしていられない。現段階では町住人のが被葬者であるとしておくのが妥当であろうか。

時期

墓地の埋葬時期は、副葬品はもちろんのこと、墓域内に混入した遺物、あるいは前後する造構の時期などから想定できる。まず墓地の形成時期であるが、

①1696年の『元禄絵図』に龍昌寺の名前が見られることから、寺は17世紀後半には存在していた。

②副葬された寛永通寶の年代觀では、新寛永銭は17世紀後半以降である。

以上から、墓地は17世紀末以降に形成されていったと思われる。

その後、若干の切り合いが認められるものの、比較的規則性をもって配置されており、墓としての認識が薄れない期間で造営されたものと思われる。

廃絶時期は、

①ST22出土の煙管の形態は、19世紀と考えられる。

②龍昌寺が幕末頃には消滅している。

③ST11が近代の井戸に切られている。

以上から、幕末には墓地に埋葬されることがなくなったと思われる。

また、墓域内を盛土により嵩上げして新たな墓地をつくるといった重層的な造営をされるほどではないことからも、短期間のうちに造営されたことがうかがえる。

類例

最後に兵庫津遺跡で発掘された墓地関係の調査を列記し、今回の調査との比較に供したい。

[兵庫津遺跡第33次調査]

第1造構面では、1m前後の区画をもつ墓群を検出し、陶器や土師質の藏骨器を検出している。大型の丹波焼壺を埋葬施設とする墓は、他の墓との間に空間を設けており、被葬者の差が見受けられる。

第2造構面では、1mの掘形をもつ埋葬施設で、東側の一群は桶棺、西側の一群は壺棺である。

江戸時代中期以降に埋葬施設の増加があり、寺院に葬られる人々がより多くなって、階層社会に変化があったことを推測している。

[兵庫津遺跡第36次調査]

長楽寺の前身と考えられる建物の南側に墓地を検出している。墓地は100基以上が確認されている。

埋葬施設は壺棺、丸桶（早桶）、箱型木棺（木櫃）、土葬墓（直葬）があり、火葬墓の藏骨器には壺のほかに、火消壺、灰入れ、火入れ、蛸壺、行平鍋などが見受けられる。最も多いのは桶棺（早桶）である。

墓標からは、17世紀ごろには墓地の形成があったと考えられており、下層では丸桶を中心とするが、上層では壺棺・箱型木棺など大型の墓が見られ、また藏骨器が増加して土葬から火葬中心の埋葬地への変化がうかがえる。

副葬品は、下層の棺では土師器皿と銅錢の組み合わせが多く、上層では土製品、銅錢、煙管が一般的である。箱型木棺からは副葬品が多くて質も良いことから、他の墓に比べると裕福な階層に属する人々

の墓と推定されている。

【兵庫津遺跡第38次調査】

浄土宗西光寺（現藤之寺）の境内地に位置し、西光寺墓地の一部を検出している。検出した16基以上の墓は全て火葬墓で、一部甕を利用した土器棺以外の多くは、桶（曲物）に茶毘にふした遺灰が入れられたものであった。副葬品は焼成された煙管・刀剣類と銭貨がごく一部出土している。

時期は19世紀と推定されており、早桶等による土葬から火葬へと変遷していることがうかがえる。

以上から、今回の調査における近世墓の特徴について、ある程度把握することができたと思われる。すなわち、18世紀から19世紀前半の円形木棺を埋葬施設とする墓で、銅錢や煙管などの副葬品をもち、規則性をもった配置をしている、ということである。

兵庫津遺跡における近世墓地の調査例はまだ少なく、埋葬形態の変化や被葬者層など、町屋における墓地様相の解明には資料の増加をまたねばならない。その時点では、本調査例も再度検討を加えられるであろう。

主な参考文献

神戸市教育委員会2007『平成16年度埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会2006『兵庫津遺跡第36次調査』

兵庫津遺跡38次調査会『兵庫津38』

神戸市立博物館2004『特別展よみがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる－』

台東区文化財調査会2000『谷中三崎町遺跡（正運寺跡）』

大成エンジニアリング株式会社2007『東京都新宿区法正寺遺跡』

鳥取県埋蔵文化財センター2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書18 門前第2遺跡Ⅱ（菖蒲田地区）』

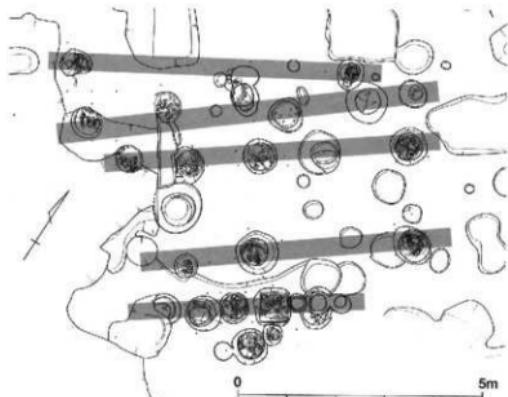


図44 墓列推定図

V まとめ

今回の発掘調査では、中世の井戸や土坑、近世の建物、土坑、溝、墓などを検出した。遺物は中世瓦や十師器、瓦器、陶磁器、金属器などが出土している。

以下、中世から近世の遺構・遺物を概観することで、当該地の景観復元や土地利用の変遷を考える一助としたい。

中世の遺構は、最終面である褐色砂上面で石組井戸や羽釜を利用した井戸、土坑などが検出された。石組井戸は現在でも水脈は生きており、調査中も清水が湧き出していた。報告した以外にも、木枠の痕跡がある井戸や、井戸であった可能性がある幅鉢状の掘形をもつ大きな土坑が存在する。この時期の建物は検出されていないが、井戸等から中世瓦が発見された状態で出土した。共伴遺物と瓦当文様から15世紀のものと思われる。

近在では、福厳寺や福海寺などが創建は14世紀初めであると伝えられており、同様な時期に当該地も寺域であった可能性が強い。ただし、遺構の面からは集落であったのか、寺域であったのかは不明である。

瓦では1点だけであるが、瓦当上面にヘラがきによる「兵庫〔座カ〕」の線刻がみられた。「兵庫」の呼称は、「実躬卿記」の弘安8年（1285年）龜山上皇の訪問記事に「兵庫島」と見られることから、鎌倉時代には存在したことがうかがえる。はたしてこの瓦の「兵庫」の文字に続きがあるのか、その意味するものは何か、現段階では類例をまつしかない。

近世の時期には、特に調査区北西側は墓地として形成されていく。近世墓地については先述のとおりであるが、造営時期は副葬品などから18世紀より19世紀にかけてと思われる。埋葬施設は、藏骨器がなくほとんどが円形木棺であり、火葬をおこなわず土葬のみという比較的単純な形態を示している。

副葬品も銅鏡や数珠、煙管など普遍的なものであり、特異な点は見られない。

今回の調査地は、「元禄絵図」では龍昌寺とされる場所に該当する。東隣は範国寺、西側は道路を隔てて久遠寺、北側は都賀堤（外輪之堤）に接する。

龍昌寺については、文献資料からも探ることができる。主なものを年代順に列記すると、

①元禄9年（1696年）の『元禄絵図』では、龍昌寺と範国寺が隣接して描かれている。

②明和9年（1769年）の『兵庫津絵図』や寛政2年（1790年）の『兵庫津寺社方絵図』では、禪宗龍昌寺の名前が見られるが、範国寺の名は見られない。

③嘉永3年（1850年）の『津中絵図』では、寺名は見られないが、寺社として塗り分けられている。

④明治2年（1868年）の『津中明細録』の寺社関係の記述のうち、5ヶ寺無堂宇とされるなかで、「龍昌寺 会下山寺」とあることから、すでに移転・消滅していたのかもしれない。

「元禄絵図」では西側の三川口町の通りに面して門があり、東側に堂宇が存在する。門を入って北側に墓地がならび、正面西向きに本堂があったのであろうか。VI区で検出した建物は、墓地の時期と重なるものである。ピットの規模は大きいとは言えないが、龍昌寺に関連する何らかの建物であった可能性が高い。

また、北隣に位置する都賀堤は、天正8年（1580年）に池田信輝が兵庫城築城に伴い構築したとされ、延長約1350m、幅約2～14mの規模があったという。『元禄絵図』の他にも寛政9年（1797年）の『外

輪堤絵図』に描かれているが、明治8年(1875年)に削り取られ消滅した。兵庫津遺跡第36次調査では、俵積み遺構など都賀堤に関連すると思われる遺構を検出しているが、今回の調査範囲内では確認できなかつた。近世期の遺構も敷地北限境界近くまで存在するため、堤は調査地北側の歩道・道路上に位置したものと思われる。

その後、幕末頃に寺は消滅し、居住域に取り込まれていったと思われる。

また先述のとおり、基盤層である砂層からは弥生土器も確認されている。他の第9次調査や第22次調査地点でも下層から弥生土器が出土しているが、第38次調査では砂堆層からは遺物は全く出土していない。地点によって弥生の遺跡に近接する場所があるのかもしれない。

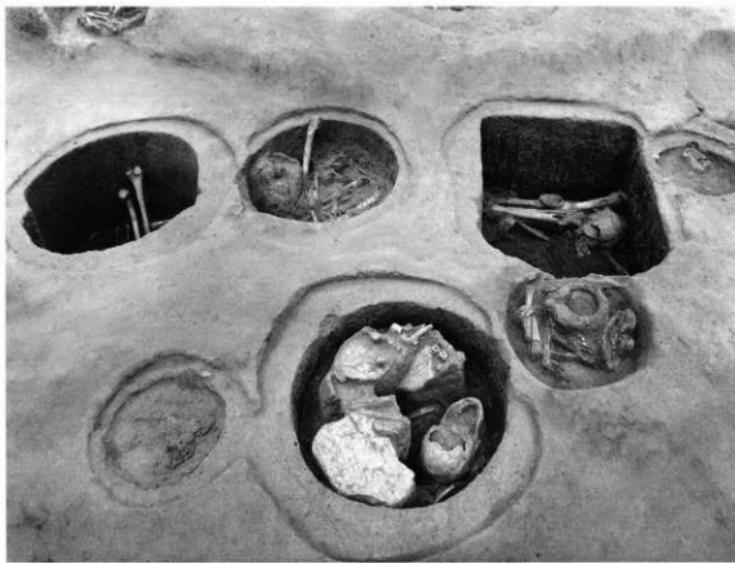
以上のように今回の調査では、特に町屋内における近世墓地の良好な資料が得られた。人生最後の段階である死に対して、人々はどのような観念を抱いていたのか。被葬者への扱いは風習や思想信条を基礎にしているものであり、当時の人々の生活史の一端を占めるものである。

圧倒的な江戸での調査例にくらべ、兵庫津遺跡ではまだ調査例が少ない。しかし、今後の資料增加で町屋における墓地の特徴が把握されることにより、江戸をはじめとする城下町や農村など、規模や階層が異なる他地域との比較もできよう。

写 真 図 版



1. 近世墓群



2. ST12~14, 18~20

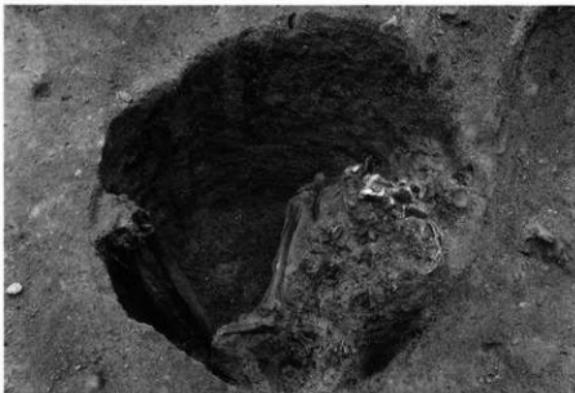
図版 2



1. ST01



2. ST02



3. ST03

図版 3



1. ST04



2. ST05

図版 4



1. ST06

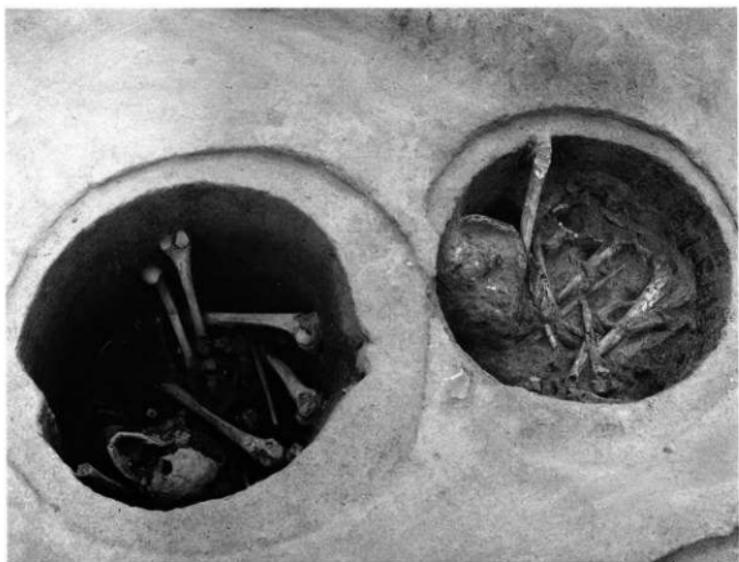


2. ST08

図版 5



1. ST10



2. ST12, 13

図版 6



1. ST09



2. ST12



3. ST14



1. ST21



2. ST22, 05



3. ST22

図版 8



1. ST19



2. ST24



3. ST24

図版 9



1. ST25



2. ST26



3. ST29

図版10



1. VI区近世造構



2. SK44



3. SK115土層断面



1. II区中世遺構



2. V区中世遺構



3. SE02

図版12



1. SE03



2. SE03断ち割り



3. SK129

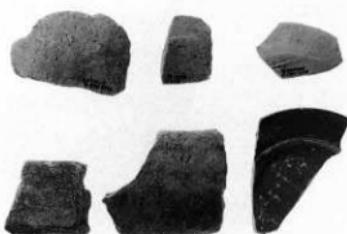
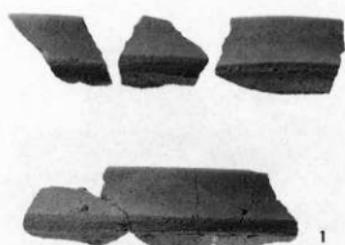


1. SK44出土遺物



2. SK115出土遺物

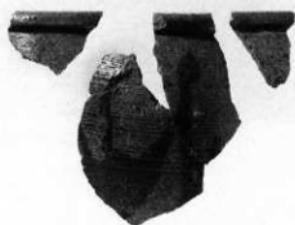
図版14



1

ST08

ST04



ST05



ST12



3

ST17



2



ST19

ST05

墓壙出土遺物



ST22

4



ST29



7

ST29



5

ST24

墓塚出土遺物



ST27

図版16



ST01

ST05

ST12

ST17



ST18

ST19



ST23



14



15



10



11



8



9

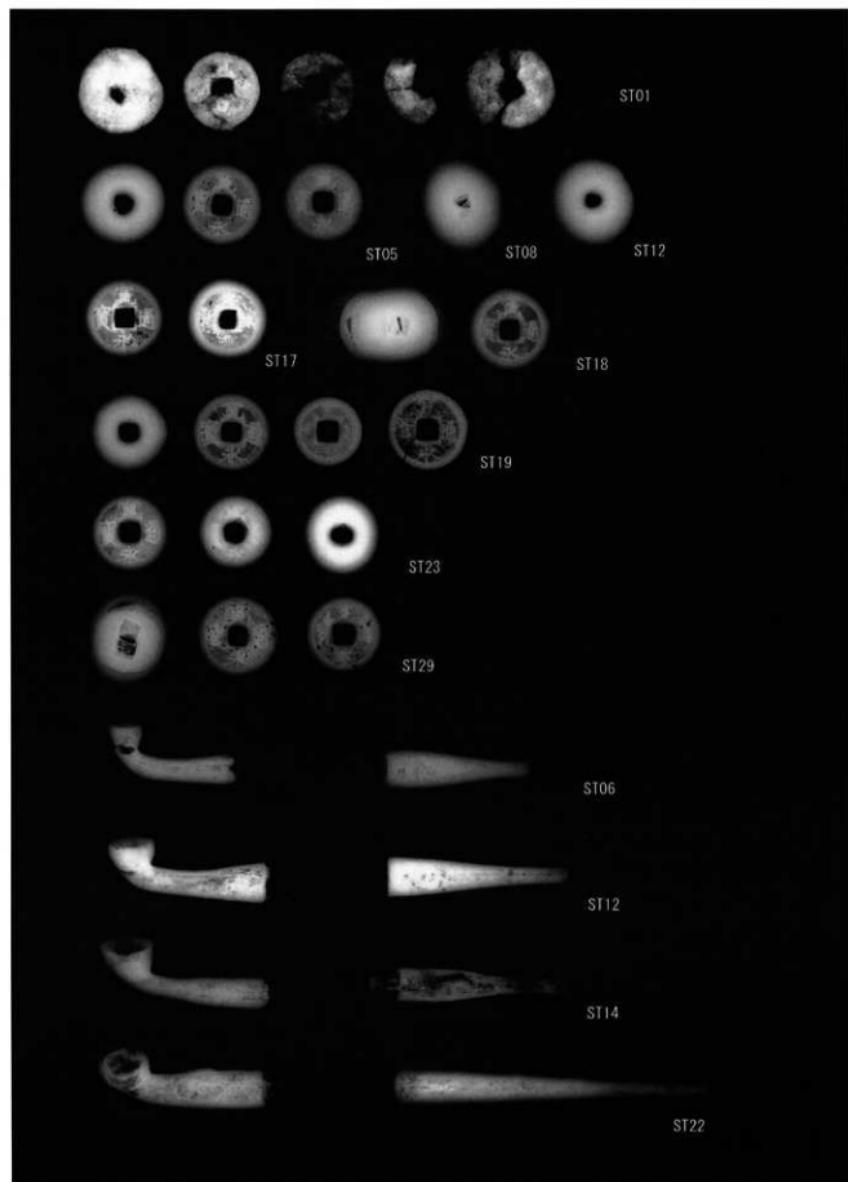


12



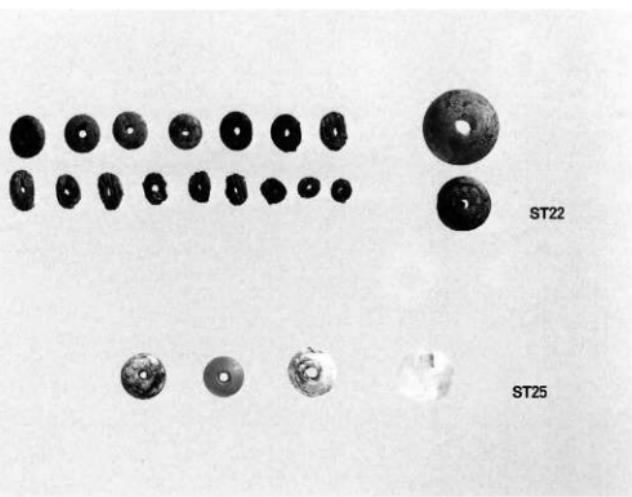
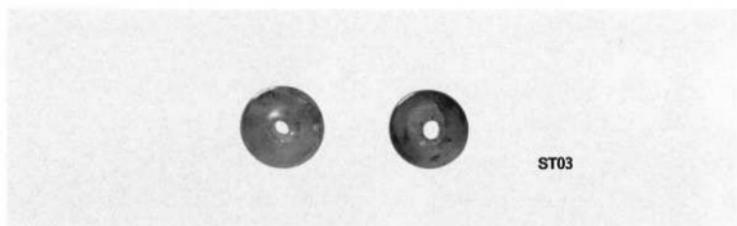
13

図版17

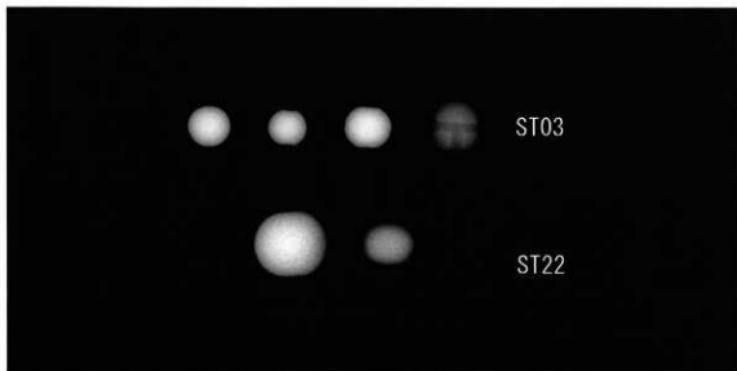


墓壙出土銅錢・煙管レントゲン写真

図版18



1. 墓壙出土数珠玉



2. 同上レントゲン写真



1. ST01人骨



2. ST02人骨



3. ST03人骨



4. ST03人骨（部分）

図版20



1. ST05人骨



2. ST05下顎骨



3. ST06人骨



1. ST08人骨

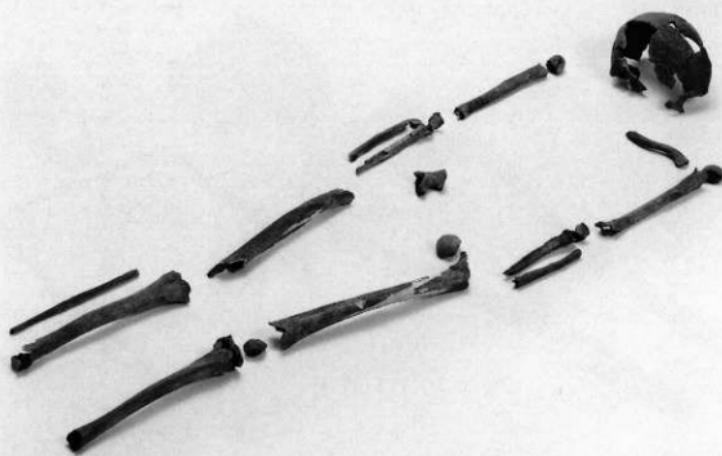


2. ST10人骨



3. ST10寛骨周辺

図版22



1. ST12人骨



2. ST14人骨



1. ST13下顎骨



2. ST14頭蓋骨側面



3. ST14上腕骨（左）・ST22上腕骨（右）



4. ST14大腿骨（左）・ST22大腿骨（右）

図版24



1. ST19-2人骨



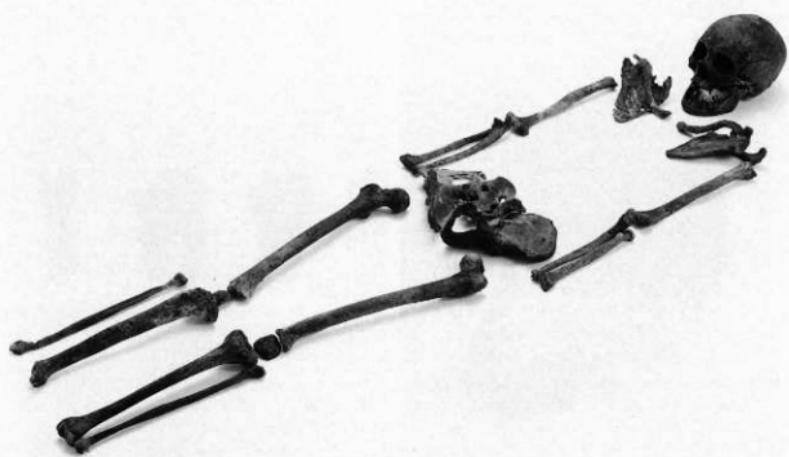
2. ST19頭蓋骨側面



3. ST20歯



4. ST21人骨



1. ST22人骨



2. ST24人骨

3. ST25頭蓋骨

図版26



1. ST28頭蓋骨・下頸骨



2. ST25齒（分析資料）

図版27



16・17



18



19



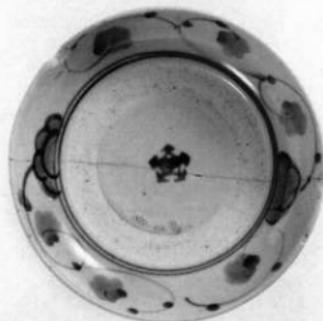
20



21



22



23



24

図版28



25



27



26



28



29



29

図版29



30



35



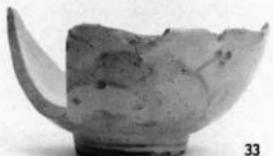
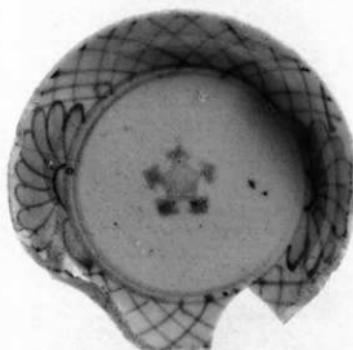
31



36



32



33



34



39

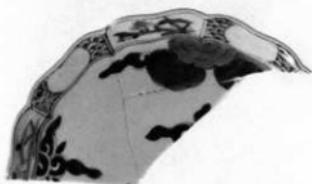
図版30



37



38



40



41



44



45



46



47



49



50



51



52



53

図版32



56



1. SK26出土瓦



54



55

2. SK129出土遺物

報 告 書 抄 錄

兵庫津遺跡第45次発掘調査報告書

2008. 3. 31

発行 神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL. 078-322-6480

印刷 福田印刷工業株式会社
神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号
TEL. 078-811-3131